

埼玉県 まなびいプロジェクト協賛事業
羽生市 学びあい夢プロジェクト事業

第4回埼玉純真短期大学 研究セミナー

子どもの思いに寄り添う ～発達障害のある子の教育・子育てに学ぶ～



平成26年10月25日(土)

会場 埼玉純真短期大学

主催 埼玉純真短期大学

後援 埼玉県教育委員会・羽生市教育委員会

加須市教育委員会・行田市教育委員会

熊谷市教育委員会・埼玉県特別支援教育研究会

目 次

1、 目 次	1	
2、 発刊のことば	埼玉純真短期大学学長 藤田 利久	2
3、 開催要項		3
4、 基調講演 「子どもの思いに寄り添って～気づきから理解・支援へ～」		
	東洋英和女学院大学准教授 平田 幸宏	
基調講演・全体会まとめ	浅井 広	5
5、 第1分科会 基礎講座	埼玉純真短期大学講師 持田 京子	10
提案者	鈴木 美芳	12
協議の内容	加藤 房江	13
指導助言者	板倉 伸夫	13
第2分科会 基礎講座	埼玉純真短期大学教授 牛込 彰彦	16
提案者	齋藤 秀吉	17
協議の内容	金子 恵美子	21
指導助言者	井上 弘江	22
第3分科会 基礎講座	埼玉純真短期大学教授 小澤 和恵	24
提案者	埼玉県立特別支援学校	
協議の内容	羽生ふじ高等学園教諭 松澤 ゆかり	26
指導助言者	安倍 大輔	29
	発達支援教室ビリーブ代表	
	文教大学講師 加藤 博之	29
第4分科会 基礎講座	埼玉純真短期大学准教授 稲垣 馨	30
提案者	雨宮 史子	31
協議の内容	細田 香織	35
指導助言者	埼玉県教育局特別支援教育課	
	指導主事 山下 理恵子	36
	埼玉純真短期大学教授 伊藤 道雄	39
第5分科会 指導助言者	熊谷市立富士見中学校教諭 三富 貴子	40
提案者	森 香明	
	熊谷市立大麻生小学校教諭 橋爪 恵里子	
	本人・保護者 新井麻衣良・俊江	
協議の内容	高橋 努	53
指導助言者	越谷市教育委員会指導主事 田嶋 栄蔵	54
6、 アンケート報告	佐藤 猛	55
7、 あとがき	埼玉純真短期大学教授 伊藤 道雄	61

発刊のことば

前回の「特別支援教育研究セミナー」は突然の大雪のため、やむなく延期とさせていただきました。そして、そのようなことが起こらない時期にと秋の開催とさせていただきましたが、この時期は行事も多く、先生がたはじめ皆さまには何かとお忙しい中、ご参加いただきましたこと改めて御礼申しあげます。

ご存じのとおり、このセミナーは平成19年度より3年間にわたって、文部科学省委託事業として、羽生市教育委員会はじめ行田市・熊谷市・加須市の各教育委員会、保育所・幼稚園・小学校・中学校・高等学校の先生方や行政関係者のご理解とご協力をいただき、予想以上の成果を収めることができました「軽度発達障害の幼児童に対する特別支援力養成のための教育職員再教育プログラム」を引き継いだものでございます。

今や「ノーマライゼイション」や「特別支援」のことばを抜きにして、現代社会そして教育現場での活動は考えられません。このため、この委託事業の内容を継続して、地域の皆さまと共に教育・研究を行い、少しでも地域社会のお役にたてればとの考え方で、引き続き「特別支援教育研究セミナー」を開催いたしております。

今回も「埼玉県まなびいプロジェクト」「羽生市学びあい夢プロジェクト」の協賛事業として、埼玉県教育委員会、羽生市・加須市・行田市・熊谷市の各教育委員会、そして埼玉県特別支援教育研究会のご後援で「子どもの思いに寄り添う～発達障害のある子の教育・子育てに学ぶ～」と題しての「特別支援教育研究セミナー」が開催されましたことは、本学にとりまして、誠に喜びにたえないところでございます。

「幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。(特別支援教育の理念平成19年4月1日 文部科学省初等中等教育局長)」とするこの考え方は、まさに教育に携わる者として、深く心に刻みに教育活動にあたらなければならない教育の本質とも言えるものでしょう。

今回の研究セミナーには、ご講演の平田幸宏先生はじめ、業務ご多忙の中、発表資料のご準備いただきご提案いただきました先生、ご指導とご助言を頂戴いたしました先生方、ご参加いただきました皆さんに心より感謝申しあげます。

本学のような小さな大学の研究セミナーではございますが、このような小さなことの一つひとつの積み重ねで、より多くの方に「特別支援教育」の理解がされていくことを願ってやみません。

最後に今大会の運営と本報告書作成にあたって頂きました本研究セミナー実行委員長の伊藤道雄先生はじめ運営いただきました皆さんに心より御礼申しあげます。

5回目となる来年、そして再来年とこの研究セミナー開催が継続されますことをお祈り申しあげ、発刊のご挨拶とさせていただきます。

埼玉純真短期大学
学長 藤田 利久

埼玉県 まなびいプロジェクト協賛事業
羽生市 学びあい夢プロジェクト事業
第4回埼玉純真短期大学 研究セミナー開催要項

子どもの思いに寄り添う ～発達障害のある子の教育・子育てに学ぶ～

ご案内 本大学では平成23年度に第1回研究セミナーを開催し、多数の皆様のご参加を得て、発達障害児の教育の理解・研究に取り組んできました。今年度は第4回を迎え、特別支援教育が大きくインクルーシブ教育に変化する中での開催となりました。

教育現場では、行政等関係者の皆さまのご理解を賜り、少しづつ環境が整備されつつありますが、まだまだ多くの課題を抱え、日々の教育実践に悩む状況であります。

また、本学では、文部科学省の事業補助を受け、「子ども支援センター」が昨年度から開設され、発達障害児のための地域の相談活動にも取り組むことができました。

この研究セミナーが、特別支援教育のさらなる研究・実践の発展に繋がり、子ども支援センターの活動の充実や地域の教育の振興に寄与することになることを期待しています。充実した研究セミナーにするためにも、多くの方の参加を得、発達障害児の理解と教育のあり方や指導方法が実証されることを願っています。

なおこの事業は、埼玉県まなびいプロジェクト協賛事業並びに羽生市学びあい夢プロジェクト事業にも指定されています。

日 時 平成26年10月25日（土）
会 場 埼玉純真短期大学
主 催 埼玉純真短期大学
後 援 埼玉県教育委員会・羽生市教育委員会
加須市教育委員会・行田市教育委員会
熊谷市教育委員会・埼玉県特別支援教育研究会

日 程

9:30	10:00～10:10	10:15～11:45	11:45～13:30	13:30～16:00
受付	開 会	基調講演	昼 食	分科会（5分科会）

基調講演

「子どもの思いに寄り添って～気づきから理解・支援へ～」

東洋英和女学院大学准教授 平田幸宏

分科会 1 201教室	「保育園・幼稚園」	保育園・幼稚園における指導のあり方	
	提案者	鈴木 美芳	加須市みつまた保育園保育士
	指導助言者	板倉 伸夫	熊谷市教育委員会指導主事
	指導助言者	持田 京子	埼玉純真短期大学講師
	司会・記録	加藤 房江	埼玉純真短期大学講師
分科会 2 202教室	「小学校・中学校」	学校における望ましい指導を探る	
	提案者	齋藤 秀吉	加須市立騎西小学校教諭
	指導助言者	井上 弘江	東部教育事務所指導主事
	指導助言者	牛込 彰彦	埼玉純真短期大学教授
	司会・記録	金子 恵美子	埼玉純真短期大学講師
分科会 3 112教室	「音 楽」	音楽を取り入れたより良い指導の工夫	
	提案者	松澤 ゆかり	埼玉県立特別支援学校 羽生ふじ高等学園教諭
	指導助言者	加藤 博之	発達支援教室ビリーブ代表 文教大学講師
	指導助言者	小澤 和恵	埼玉純真短期大学教授
	司会・記録	安倍 大輔	埼玉純真短期大学講師
分科会 4 203教室	「高等学校」	将来につながる指導のあり方	
	提案者	雨宮 史子	埼玉県立新座高等学校教諭
	指導助言者	山下 理恵子	埼玉県教育局特別支援教育課指導主事
	指導助言者	稻垣 馨	埼玉純真短期大学准教授
	司会・記録	細田 香織	埼玉純真短期大学講師
分科会 5 205教室	「特別支援学級・特別支援学校・通級指導教室」	専門性を生かした指導	
	提案者	三富 貴子	熊谷市立富士見中学校教諭
		森 香明	熊谷市教育委員会指導主事
		橋爪 恵里子	熊谷市立大麻生小学校教諭
		新井麻衣良・俊江	本人・保護者
	指導助言者	田嶋 栄蔵	越谷市教育委員会指導主事
	指導助言者	伊藤 道雄	埼玉純真短期大学教授
	司会・記録	高橋 努	埼玉純真短期大学講師

子どもの思いに寄り添って
～気づきから理解・支援へ～

東洋英和女学院大学准教授 平田幸宏

○コミュニケーションツール

他者とのコミュニケーションをとる場合、一般的なコミュニケーションツールは「音声言語」です。「音声言語」は聴覚を通して他者とのコミュニケーションを図るもので、「聴覚刺激」、「聴覚情報」とも呼ばれ、他者からの情報を受け取ることによって成立します。この「聴覚刺激」は、言語の獲得、音声を発信・受信する能力を有するため、コミュニケーションツールとしては高度なものとなります。

「音声言語」以外にもコミュニケーションツールは存在します。さまざまな表現がありますが、目から入ってくる情報、つまり「ジェスチャー」や「表情」によってもコミュニケーションをとることは可能です。これは視覚から得る情報ですので、「視覚刺激」、「視覚情報」と呼ぶことができます。こうした「音声言語」や「視覚刺激」といったコミュニケーションツールは、一方が発信(アウトプット)し、もう一方が受信(インプット)することによって機能しています。

通常、私たちは「音声言語」を使用してコミュニケーションを図りますが、簡単な情報ならば、目から入ってくる情報、つまり「ジェスチャー」や「表情」といった「視覚刺激」によってコミュニケーションを図ることもできます。逆に言えば、「視覚刺激」の方が他者とのコミュニケーションを図れやすい場合もあります。例えば、2人ペアとなって「右手の手のひらと右手の手のひらを合わせて下さい」と「音声言語」で発信した場合、様々な合わせ方があり、ペアによって手のひらの合わせ方は異なります。しかし、発信者が合わせ方を「視覚刺激」として手本を見せながら発信すれば、受信者は発信者と同じように、言い換えれば、発信者の意図したように情報を受信することが容易になります。もし、発信者が「音声言語」だけで情報を発信し、かつ発信者が望むように、正確に情報を受信してもらいたいとするならば、その情報量は膨大なものとなってしまうこともあるのです。したがって、幼稚園、保育園、小学校等の保育者や教師は、子どもたちに手本を見せながら活動内容を説明します。これは当たり前のことのようにされていることですが、大切なことなので、そのことを再認識いただければと思います。

「音声言語」や「視覚刺激」の他にも、触覚を使つた「身体接触」というものがあります。人間の成長を考えた際、生まれたての赤ちゃんは「音声言語」、「視覚刺激」を使用してのコミュニケーションを図ることができません。泣いたり、笑ったりして、大人へ何らかの情報を発信することは出来ても、情報を受信することはまだまだ難しいのです。そのため、大人は赤ちゃんを抱っこしたり、顔を触ったりして、「身体接触」を通して赤ちゃん

んとのコミュニケーションを図ろうとします。したがって、この「身体接触」こそがコミュニケーションのベースにあると言えるでしょう。

○人間の心理特性

人間の心理特性には様々なものがありますが、人間は先の見通しが立たない場合、非常に大きな不安を感じます。例えば、何の情報も伝えられないまま檻上に立たされたとしたら、「これから何をさせられるのだろう」と、不安は大きく膨らませた風船のように大きくなります。逆に、先の見通しを持てるだけの情報がある際は、小さな水風船のように、その不安も小さくなります。情報がある場合とない場合では、その心理状態は大きく変わることです。

そしてもう一つ心理特性として、少数派(マイノリティ)は多数派(マジョリティ)に合わせようとするということを、知っておいていただきたいと思います。

○パニックはどうして起こるのか

従来の障害児教育、特殊教育の時代の対象は、主要な5障がいが対象となっていました。視覚障害、聴覚障害、運動障害、病弱虚弱、そして知的障害の5つです。この主要な5障がいに加え、これまで「狭間の障がい」とも言われてきた発達障害も加わってきました。

一般に視覚障害の子どもたちは「目の不自由な子どもたち」、聴覚障害の子どもたちは「耳の不自由な子どもたち」と呼ばれます。しかし、知的障害の子どもたちのことを「脳の不自由な子どもたち」、「頭の不自由な子どもたち」とは呼びません。それは何故でしょうか。知的障害は、脳の機能障害であることが分かっていますが、「脳の不自由な子どもたち」と呼ぶには違和感を覚えます。そこで、知的障害の子どもたちと一部の発達障害の子どもたちに関しては、「音声言語(言葉)によるコミュニケーションが不自由な子どもたち」と捉えてみてはどうでしょうか。ある参考書では知的障害のことを「言葉が通じない国で一人取り残されたような感覚」と例えており、この状況を想像すれば、「音声言語」という1つのコミュニケーションツールを使えなくなっただけで、私たちがどれだけの不安に陥るかは容易に想像できます。そのことを踏まえれば、知的障害や一部の発達障害の子どもたちは、「音声言語によるコミュニケーションが不自由な子どもたち」であるとともに、「音声言語」でのコミュニケーションが難しいがために、「音声言語」を中心とした生活圏では先の予測がつきにくく、不安を抱えている子どもたちと捉えることができます。

つまり、知的障害や一部の発達障害の子どもたちは、「音声言語によるコミュニケーションが不自由」 + 「先の見通しが持てず不安」な子どもたちなのです。

そうした子どもに、「音声言語」で畳み掛けるように情報を発信したり、先の見通しが持てないにもかかわらず、無理に引っ張って移動させようとしたらどうなるでしょうか。子どもの不安はどんどん大きくなり、大きく大きくなつて、これ以上大きくなれなくなつた時に破裂してしまうのです。これが「パニック」と呼ばれる状態です。パニックに陥ってしまう状態を見抜けないと、「どうして?」とか「何があったの?」と周りは困惑してしまいますが、パニックは突然起ころうではなく、何かしらの原因、形成過程があるので

ないでしょうか。したがって私たちは、「音声言語」のみならず「視覚刺激」や「身体接触」も使って子どもたちの不安を軽減しつつ、生活を共にしていくことが基礎、基本となってくるのです。

○教師の支援

横軸を生活年齢(CA：クロノミカルエイジ)とし、縦軸を発達年齢(DA：ディベロップメントアルエイジ)とします。学校教育では新版 K 式発達検査などを使用しますが、それによって算出されたものです。

発達期の発達曲線は、生活年齢と発達年齢が比例したようなグラフになりますが、当然個人差がありますので、幼稚園や保育園、小学校などで便宜的に編成されたクラスの子どもたち全員の発達曲線が、正比例の直線状に並ぶわけではありません。発達が早い子どももいれば、ゆっくりとしている子どもがいて当然です。しかし、概ね生活年齢が発達年齢相応の値となってきます。

では、例えばある 6 歳児のクラスに知的障がいをもっている自閉症スペクトラムのゆきひろ君が加わったと仮定してみましょう。ゆきひろ君は、発達検査をしてみたら 4 歳程度の生活年齢でした。

この時、多くの担任の先生が気になるところは、ゆきひろ君と他の子どもとの発達曲線の差になるわけです。「通常の子どもたちはお箸を使って上手にお弁当を食べられるのに、ゆきひろ君はまだスプーンを使ってもこぼしてしまう。どうやったらお箸を使って食べられるようになるでしょうか?」そういった、他の子どもとの差が気になって仕方ないです。すなわち、いろいろな表現ができますが、ゆきひろ君は「できない」、「遅れている」子どもとなってしまいます。あるいは「できない」、「遅れている」といった表現をまとめて「障がい」となってしまうかもしれません。

特殊教育、障害児教育の時代は、障害児教育のねらいは「障害の克服と改善」でした。つまり、ゆきひろ君と他の子どもたちの差をどうやって埋めるのか、別の言い方をすれば、ゆきひろくんを他の子どもたちの発達曲線までどうやって近づけるのか、これが障害児教育の時代の目的がありました。

ところが、特別支援教育になってポイントが大きく変わりました。ゆきひろ君は 6 歳ですが 4 歳相当の発達でした。ということは、4 歳段階の発達の指標はすべて満たしている、4 歳段階の実力はきちんと持っているということでもあります。文科省では、このことを「できる力」と表現しています。特別支援教育になってからは、子どもたちの「できる力」を日常生活で發揮させて下さい、実力發揮の支援を教師はプロとして、専門職として行って下さい、というところに視点が変わってきています。

したがって、教師はジェスチャーや表情、絵カード、写真カードなどを使って、子どもたちの視覚を使って実力發揮の支援をして下さい、上手に身体接触を使って実力発揮の支援をして下さいとなっています。子どもたちは、自分の実力が發揮できると「僕もできた!」、「私もできた!」と達成感や成就感を味わうことができます。そうすれば、「もう 1 回やってみよう!」となっていました。これを「動機づけ」と呼びます。これによって、

子どもたちの発達曲線も、徐々に徐々に右肩上がりに上がっていくのです。

○まとめ

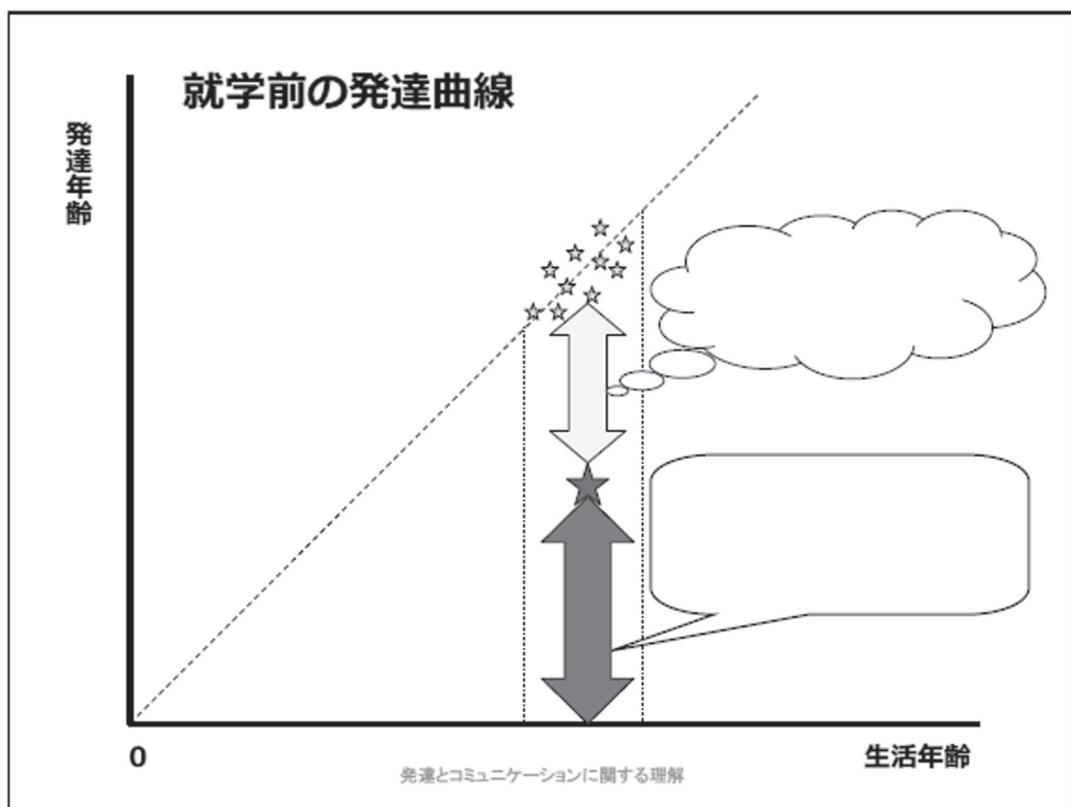
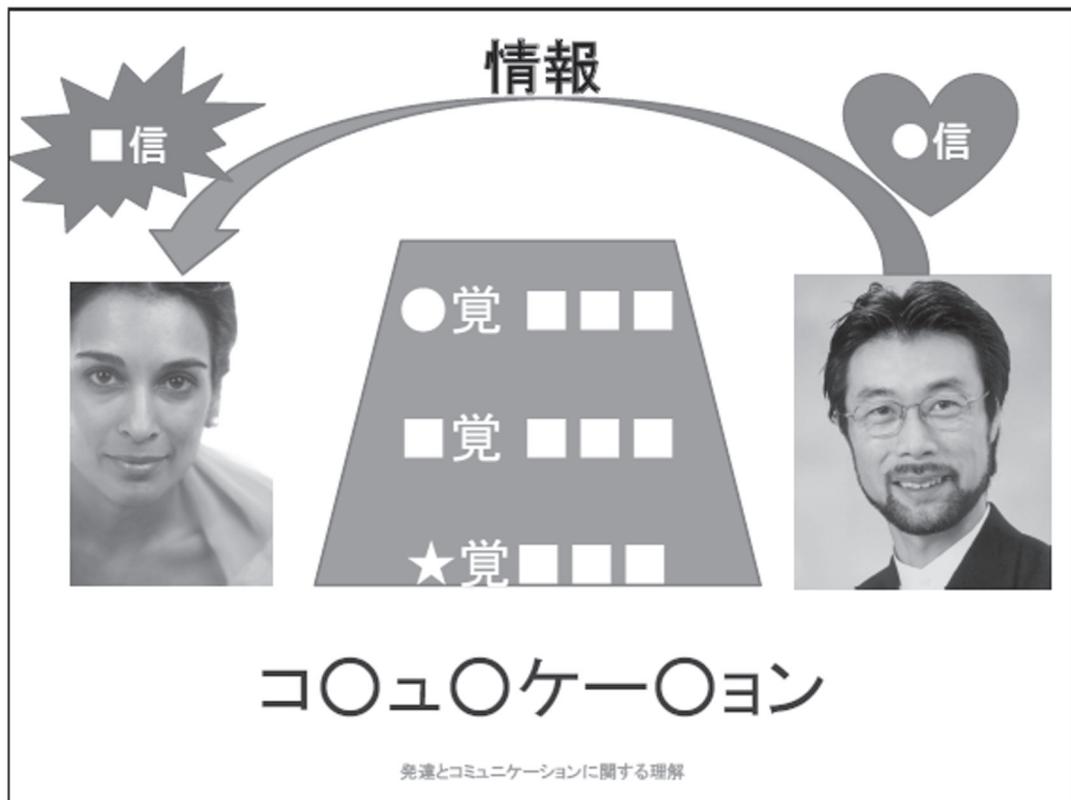
風船が大きくなつて、割れてしまつてゐる子どもたちをよく見かけます。Aちゃんはお母さんと幼稚園から帰る途中、突然、心の風船が割れてしまつました。それは、お母さんが買い忘れた物を買いに行こうといつもと違う道に曲がつた時のことでした。

翌日、お母さんは幼稚園の先生に昨日のAちゃんの様子を尋ねました。しかし、特に変わつた様子はなかつたようでした。ただ、昨日は一日中雨が降つていて、大好きな外遊びができませんでした。また、大好きなプラレールも年長の子が使ってできなかつたとのことでした。Aちゃんは「おうちに帰つたら、プラレールができる！プラレール！プラレール！」そうやつて先生とお母さんのお迎えを待つてゐたそうです。

そして大きくなつていつたAちゃんの風船は、お母さんが買い物に行こうと急に曲がつたことで、「パンッ！」と割れてしまつたのかもしれません。

子どもたちはいつたん膨らんだ風船をどうすることもできません。しかし、風船にセロハンテープを貼つてその上から画鋸を刺した時のように、大きくなつた風船もゆっくりと空気が抜ければしばませることができます。大人は情報不足で不安になつた時、自分で情報収集をすることによって不安を解消することができます。ストレスも同じように解消することができます。ところが、子どもたちは大きくなつた風船をゆっくりとしばませることが苦手です。したがつて、先生方には子どもたちの大きくなつた風船に気が付いて、ガス抜きの支援をしていただきたいのです。

(文責 埼玉純真短期大学 浅井広)

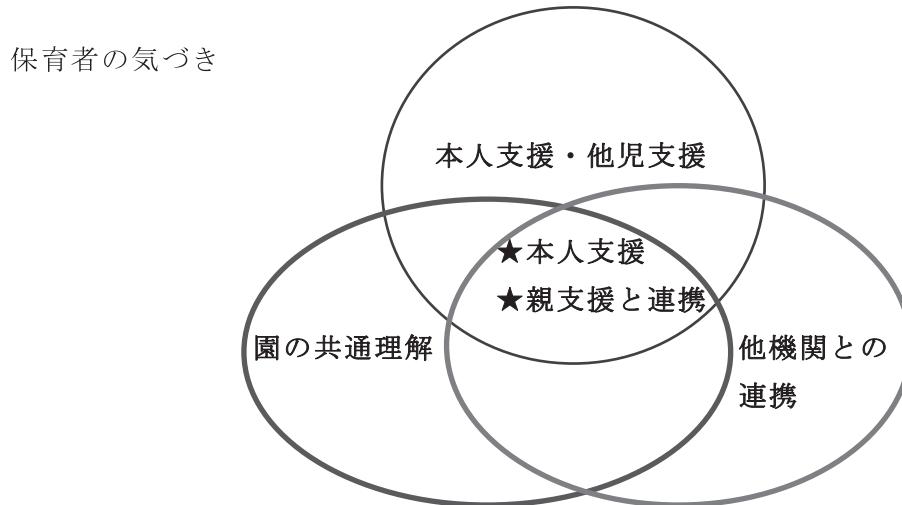


第1分科会「保育園・幼稚園」 保育園・幼稚園における指導のあり方
基礎講座

埼玉純真短期大学 持田京子

(1) 支援は連携の基で行うことが基本 (資料参照1)

- 1、 保育者としての気づきと学び
- 2、 園全体での共通理解
- 3、 他機関との連携 (巡回相談・地域で相談できる場・地域の医療機関)



(2) 早期発見・早期支援

- ・早くその子の特性に気付き、その子どもの得手、不得手を知り、親と共に「それでよい・素敵だよ」と、何事も自分から自信を持ってチャレンジできるように助け見守りましょう。
- ・本人への支援と、周りの子どもへの暖かい声掛けと周りの子どもが理解できる分かりやすい環境づくりを、ねらいをもってしましょう

(3) ねらいを持ち、対象児にもねらいが分かるようにする保育

- ①一日1回は、5分程度でもその子どもを抱いたり膝に乗せて、保育者との楽しい時間を作り、子どもとの信頼関係を深める計画をしましょう。
 - ・否定形ではなく、肯定的に指示をしましょう。例「走らない→歩きましょう」
 - 対にしての声掛けも有効「このクレヨンは使わないで○○君のクレヨンを使います」
 - ・指示は具体的に、分かりやすく「1のお声だったけど、今度は5のお声でね」
 - ・視覚的に分かりやすくする・声をはっきり、しつこくしない
 - ・保育者の要求は出来るだけ少なめに
 - ・達成できたら褒める → すぐ褒める・「褒め言葉」だけにする（余計なことは言わない）・皆の前で褒める（叱るときは個別に）
- ②予告する → 前もって予定を知らせる ・マイナスの行動をする前に声掛けする

(4) クラス運営

- ・みんな違っていいという担任の気持ちが大切 特別扱いはどの子にもある
- ・自分のマイナスな気持ちに引きずられない・巻き込まれないで子どもの成長を信じて笑顔で過ごすことが何よりも大切ですね(参考文献:発達障害児への気付きと支援について)

第1分科会「保育園・幼稚園」　保育園・幼稚園における指導のあり方

「共に育ち合う保育を」
～健常児と障害児の日常的な交流（あそび・生活）～
提案者 加須市みつまた保育園保育士 鈴木美芳

1、みつまた保育園のあゆみと概要

2、子どもの思いに寄り添った支援を

- ① 職員同士の連携をもち、園全体でひとりひとりを見つめる
- ② 発達に遅れのある子を見逃さない・親支援の必要性
- ③ 他機関との連携・小学校との交流

3、統合保育のもつ意義と大切さ

統合保育・・・障害のある子どもと健常児が一緒に生活やあそびをする保育

- ① クラスの保育の中での様子
- ② 生活環境と外部環境
- ③ 保護者との連携
- ④ 園生活を通しての変化

4、今後に向けて

第1分科会「保育園・幼稚園」 保育園・幼稚園における指導のあり方

「協議の内容」

提案者からの実践報告

「共に育ち合う保育を」

～健常児と障害児の日常的な交流（遊び・生活）～

加須市みつまた保育園保育士 鈴木美芳

1、 みつまた保育園のあゆみと概要

カラーの園便りや写真などを基に創立のあゆみや施設の様子、また、障害児保育の園全体で取り組み、OMソーラーシステムや病後時保育、夜間保育など園の保育の取り組みや環境について。

2、 子どもの思いに寄り添った支援を

- ・園全体の研修を通し情報を共有し、職員同士の連携をもち、園全体でひとりひとりを見つめる。これにより発達に遅れのある子を見逃さない。親支援の必要性も重要。他機関との連携や小学校の交流を図ることで、連続性のある支援ができる。

3、 統合保育のもつ意義と大切さ

障害のある子どもと健常児が一緒に生活や遊びをする統合保育において年長児H君の実践例の紹介。

- ・乳児クラスから入園しているので生活の流れは分かるが普段の動きと違うと泣き、戸惑いがみられた。しかし、保育士や他の園児の支援・自らの学びにより、模倣するようになる。同じ時間と同じ様に過ごすことで、生活でき、出来ることも増えていく。

これにはクラスの保育の中での見守りや生活環境と外部環境を整え、保護者との連が大切である。

指導助言

指導助言者 熊谷市教育委員会指導主事 板倉伸夫先生

昔の特別支援から比べると統合保育が進められ、変わったと感じると共に、嬉しさを感じている。いろいろな園を見学すると英語や鼓笛などに取り組んでいて、やることがあります。多くの園も見受けられる。いろいろな発達がスポイルされてしまい、勝利することや見せるための完成度を上げることなどに力が注がれている。「やらせよう」とすると保育士や子どもたちもイライラしてしまう。子ども自身の脳力や伸びを信じたい。

子どもと接しているとどうしても叱るという部分はある。そんなときは、「〇〇はだめだよ。こうなふうにやるといいんだよ。」と叱るだけでなくどうしたらよいかを伝えることが大事。環境を整え、クラスの雰囲気づくり、皆と一緒に学べることが大切。

クラス運営の上手な先生は、出来ている事に目を向け、ポジティブな見立てができる。そして、自ら気づいてやれるよう環境づくりを設定している。

発達障害だけでなくすべての子に支援が必要。この子は〇〇が必要というように、元気に楽しく園生活が送れるよう全ての子にかかわる視点を持つ。

「こうやつた方がいいな」など、いろいろな気づきやアレンジした発想を持ち、できることで楽しくなるように。そして、多様なチャンネルを持つことで、集団をまとめクラス経営ができる。

指導助言

—発達障害児への気づきと支援について—

指導助言者 埼玉純真短期大学講師 持田京子

(1) 支援は連携の基で行うことが基本

- ・生まれつきの特性で「病気」とは違い、中枢神経に障害がある。
- ・発達障害のタイプや診断基準。
- ・保育者として正しい知識・学びを通して、他の園児にも正しい対応や支援の気持ち・優しい気持ちを育っていく。
- ・園での共通理解を図り、園全体で支援していく。
- ・その子に合わせた他機関との連携を図りネットワークをつくる。

上記の支援を統合しながら、本人支援や保護者支援との連携を深めサポートしていく。

(2) 早期発見・早期支援

- ・園全体でサインを見つけることで早くその子の特性に気づき、その子どもの得手、不得手を知り、何事も自分から自身を持ってチャレンジできるよう見守ることが大切。望ましい支援へ。
- ・本人の支援と共に、保育者の温かい雰囲気が、周りの園児への温かい声掛けや環境づくり。
- ・早期に支援することで親が子どもをありのままに理解し、その成長を専門家と連携し、情報を得ることでよりよいかかわりが見えてくる。

(3) ねらいを持ち、対象児にもねらいが分かるような保育

- *保育者との楽しい時間を作ると共にスキンシップを図り、子どもとの信頼関係を深める計画。
 - ・何に困っているのかを知る。分からないので混乱しているので、分かりやすく環境調整する。
 - ・肯定的な声掛けをし、指示は具体的に分かりやすく伝えるよう心がける。
 - ・絵カードなどを使用し、視覚的に分かりやすくする・はっきりした声掛けをする。
 - ・周りの環境や友達の調整。
 - ・達成できたら褒め、皆の前で褒め自信に繋げる。
- *前もって予定を知らせ、見通しが持てるようにする。

(4) クラス運営

- ・担任の温かい雰囲気、みんなそれぞれ個性があり、みんな違っていいという気持ちが大切。
- ・子どもの成長を信じ、笑顔で過ごす。
- ・その他、発達障害についての基礎知識について・・・

参加者による協議やフロアからの質問回答

- ・療育施設から保育園に入所するが、対応に配慮すること：トラブルになった場合、職員が間に入り、お互いの話を別々に聞いて対応する。
- ・肯定的にかかわって、励ましたり、具体的に分かりやすく伝えることが有効。
- ・障害をもっている子のサインを見つける。黙る・動かない・言葉が出ない・噛み付く・泣く。泣きも不安から泣くのか、かかわりの中で発見していく。
- ・褒めるときは全体で、注意は個別に伝えるなど内容により、話し方に配慮する。
- ・パニックを起こすタイミングなどをよく観察して知り、抱きしめたり甘えたい気持ちを受け止める。
- ・1歳児の男児：押したり保育室からでてしまったりして対応に苦慮している。根気よく対応すると共に、環境を見直し、他のクラスや園全体の職員と情報を共有する大切さに気づき、怪我のない様にしていきたい。
- ・その他いろいろな気づきや発見があった。

*障害のある子と共に学べる環境作りや園での共通理解や園全体で取り組み支援していくことの大切さを改めて実感し、具体例が学べる研修であった。

(文責 埼玉純真短期大学 加藤房江)

第2分科会「小学校・中学校」 学校における望ましい指導を探る
基礎講座

埼玉純真短期大学 牛込彰彦

最近になってようやく「発達障害」という言葉が世間一般に広く知れ渡ったように感じる。また広く一般の人がこの障害について理解することは、発達障害を持った人が安心して社会で活躍するための基礎になる。

最近、「障害」という言葉が独り歩きし、その疾病に対する不当なイメージが固定化しつつある。それを避けるため、疾病的名称を変更する動きがある。

米国精神医学会が作る精神疾患の診断基準「DSM」が改訂されたのに伴い、平成26年5月28日、日本精神神経学会はわかりやすい言葉を使うとともに、患者の不快感を軽減する等の目的も考え合わせ、次のように疾患名を変更した。

旧	新
アスペルガー障害/自閉性障害	自閉スペクトラム症
注意欠如・多動性障害	注意欠如・多動症
学習障害	限局性学習症

本日の基礎講座では、発達障害における「薬物療法」について考える。

薬物療法というと、少し怖く感じる方もいるかと思う。「薬なんかで治るの?」「副作用が怖い」「必要ないのに飲まされるんじゃないかな」など、不安を持つ方も多いはずである。

もともと「発達障害」は脳に起因する障害であって、生育環境や教育によってもたらされるものではない。また、本人の努力によってすべてが好転するわけでもない。この場合、多くの人がこの障害について理解すること。また、本人の近くにいる人が本人を理解し、それに応じた環境を整えることなどが本人の「生きづらさ」を軽減するために必要となる。

「薬物療法」は、本人の「生きづらさ」を軽減する一つの方法である。

薬物療法は、現在のところ原因を治療するものではなく、障害によってもたらされる好ましくない現象を少なくし、二次障害の発生を防ぐ、または軽減するなどが主目的となっている。

安易に薬に頼るのではなく、「好ましくない現象」と「生きづらさ」のバランスをしっかりとと考え、医師と十分に相談してから服用を検討すべきである。また、服用に関し疑問などあれば、納得できるまで、医師からの説明を受けるべきである。服用における本人の変化は、周りにいる保護者や教員が一番理解している。効果的な服用を望むためには、服用による本人の変化を医師が正確に知ることが必要となる。その意味で、症状の推移に関する情報を医師に提供することは必須である。

選択肢としての「薬物療法」を頭の片隅においておくことは、無駄ではない。

第2分科会「小学校・中学校」 学校における望ましい指導を探る

交流及び共同学習について ～交流ノートと生活単元学習を通して～

提案者 加須市立騎西小学校 齋藤秀吉

<p>交流及び共同学習について</p> <p>～交流ノートと生活単元学習を通して～</p> <p>加須市立騎西小学校 教諭 齋藤秀吉</p> 	<p><わかば学級（知的）の概要について> (わかば1組) 在籍児童数 5名（男子2名、女子3名） 6年2名、2年2名、1年1名</p> <p><障害の状況> 知的障害 4名、ダウン症 1名</p> <p><児童の特徴></p> <ul style="list-style-type: none">集団行動が取れる。自己表現が苦手な児童がいる。6年生の女子がリーダー的存在である。 
<p>今日の発表内容</p> <ol style="list-style-type: none">学校及び学級、児童の実態具体的な取組<ul style="list-style-type: none">(1) 本校における特別支援学級の目標(2) 実践の内容<ul style="list-style-type: none">①交流及び共同学習の実際②交流及び共同学習での工夫成果課題 	<p>(わかば2組) 在籍児童数 5名 男子3名（6年）、女子2名（5年1名、4年1名）</p> <p><障害の状況> 知的障害3名、広汎性発達障害1名、高機能自閉症1名</p> <p><児童の特徴></p> <ul style="list-style-type: none">6年男子は、活発な児童が多い。自己表現が苦手な児童もいる。不登校で休みがちな児童もいる。 
<p>1 学校及び学級、児童の実態</p> <ul style="list-style-type: none">児童数390名、15学級特別支援学級3（知的2、情緒1）全校児童の内、福島県双葉町からの児童33名（知的学級2名、情緒学級2名） 	<p><青葉学級の児童の実態></p> <ul style="list-style-type: none">あいさつが上手絵や工作が得意作業が好き体を動かす活動を多く取り入れている。調理学習が好きである。ただ、集団になると力が發揮しづらい。 
<p><青葉学級（情緒学級）の概要について></p> <ul style="list-style-type: none">平成24年4月 自閉症・情緒障害学級（青葉学級）新設通常学級に配慮を要する児童が増えている。 在籍児童男：男子4名（2年1名、6年3名）障害の状況 自閉症スペクトラム A D H D学級の特徴 6年生が多い。集団行動が取りづらい。 異学年集団で相互に協力している。	<p><わかば学級の児童の実態></p> <ul style="list-style-type: none">友達と外で遊ぶのが好き活発で協力的集団行動が取れることが多い <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none">役割分担をして、意欲づけをしていく。お互いの伝え合いややり取りを大切にする。 

2 具体的な取組

- (1) 本校における特別支援学級の目標
- ・日常生活に必要な基本的な知識や技能及び習慣を養う。
 - ・情緒の安定を図り、よりよい集団生活ができるような能力と態度を養う。
 - ・心身の調和のとれた発達を図り、健康な体の育成と豊かな心を養う。

<交流及び共同学習のねらい>

- 1 障害のある子どもと障害のない子どもが相互のふれ合いを通じて豊かな人間性を育む。
- 2 1人1人の実態に応じて教科のねらいを達成する。



<具体的な交流及び共同学習のねらい>

- ・障害児に対する正しい理解を深め、思いやりのある心や仲間としてともに生きようとする心を育てる。
- ・生活経験を広めることにより社会性を養い、好まし人間関係やともに生きようとする力を育てる。

(2) 実践の内容

- ① 学校行事での交流
<林間学校・運動会など>



- ・お互いのよさが分かるグループ編成
- ・登山という一つの目標に向けた取り組み
- ・組体操など力を合わせた活動



<校内持久走大会>



- ・一人一人に寄り添う支援
- ・日ごろの練習への意欲づけ
- ・苦手意識の克服



<加須市郷土かるた大会>



- ・通常学級の児童と同じ土俵での参加
- ・児童同士の競争と協力

<奉仕活動>



- ・学校への感謝の気持ちを込めて
- ・学校をきれいにする取組
- ・6年生の活動をお手本に

<校内学習発表会（おおかみと7匹の子やぎ）>



- ・先生方、保護者に見てもらう
- ・適切な役割分担

<1・2年生対象に学習発表会>



- ・対象を限定
- ・大道具・小道具の活用
- ・わかば・青葉学級の児童と一緒に活動

② 総合的な学習

<米づくり>

- ・貴重な体験ができて子どもたちも意欲的に取り組めた。
- ・对外行事への適切な対応→十分な打ち合わせ



<外国語活動>

曜日の学習 ゲーム形式で



- 学年へ入った授業から特別支援学級独自の活動へ
- ゲーム形式の方が子どもたちが意欲的に活動する。

<交流給食>

わかば・青葉合同 学年との交流




- 1学期は、交流学級に行く。
- 2学期は交代で特別支援学級に来てもらう。

<生活単元学習（ありがとうを届けよう）を通して>

- 児童会活動で行っている「ありがとうの手紙」と連動して「郵便屋さん」を行うことで自然に活動できた。
- 学期1回の活動があるので活動機会が多く持てた。
- 学校の中での役割ができ自己肯定感が持てるようになってきた。



- 自分からポストを作ったり、手紙を書いたりと意欲的な面が見られるようになってきた。
- ポストを確認して手紙が届くのを楽しみにつるようになった。



② 交流及び共同学習の工夫
～円滑に交流を進めるために～



ア 交流ノートの内容

- その日の出来事、気になることを記入
- 次回の予定の記入




イ 週計画表の活用

- 毎週金曜日に週予定表を出す。
(通常学級担任と保護者へ)

曜日	月	火	水	木	金	土
1	～	～	～	～	～	～
2	～	～	～	～	～	～
3	～	～	～	～	～	～
4	～	～	～	～	～	～
5	～	～	～	～	～	～
6	～	～	～	～	～	～

ウ 実験等作業的な学習への参加

- 理科の実験や社会の地図を使った学習
- コンピュータでの調べ学習



エ 意図的な情報交換の場の設定

- 学期1回程度の情報交換・評価の場を設ける



3 成果

- 体験の幅が広がり意欲的に活動できた。
- 特別支援学級の児童と通常学級の児童とのかかわりが増えた。
- 年下の児童との交流の方が意欲的に活動できた。

<指導体制>

- ・交流ノートを書いてもらうのが負担になったが、予定変更時など参考になった。
- ・子どもとすぐに次回の内容を確認できた。その結果、保護者とも連携できた。



御清聴ありがとうございました。

4 課題

- ・子どもの実態を共有することができていない。
- ・双方にとってねらいが達成できる活動をさらに探すこと。
- ・よかつた活蓄積すること。
- ・ノートプラス一言を声を掛け合うこと。
- ・保護者へも活動の様子を伝えていく。



第2分科会「小学校・中学校」 学校における望ましい指導を探る

「協議の内容」

提案者からの実践報告

交流及び共同学習について

～交流ノートと生活単元学習を通して～

加須市立騎西小学校教諭 齋藤秀吉

騎西小学校における特別支援学級3クラスの様子が紹介され、通常学級との交流や共同学習について具体的な取り組みが報告された。

○交流及び共同学習の実践

- ・学校行事での交流として、林間学校や運動会、校内持久走大会、郷土かるた大会、奉仕活動、校内学習発表会、1、2年生を対象にした学習発表会など多くの行事で交流が行われている。登山など1つの目標に向けた取り組みを行うことで成長が見られた子どももいる。
- ・総合的な学習での交流として、米づくり、外国語活動、交流給食（交流学級で、特別支援学級で）などを行い、外国語活動ではゲーム形式にする工夫で子どもたちが意欲的に活動する様子が見られた。
- ・生活単元学習（ありがとうを届けよう）を通して、児童会活動「ありがとうの手紙」と連動し、「郵便屋さん」活動を行うことで、学校の中での役割ができ、小学校の一員であると感じられることが子どもたちの自己肯定感にもつながった。また、自らポストを作る、手紙を書くなど意欲的に取り組む様子が見られた。

○交流及び共同学習の工夫

- ・交流ノートを活用し、その日の出来事、気になること、次回の予定を記入するようにした結果、予定変更時の確認や次回の確認にも役立ち、保護者との連携にもつながった。さらにノートに加えて、声を掛け合うことも今後の課題である。
- ・週計画表を活用し、毎週金曜には週予定表を通常学級担任と保護者へ渡すことで連携を図った。
- ・理科の実験や社会の地図を使った学習な、コンピュータでの調べ学習など、学習内容に合わせて作業的な学習への参加を進めた。
- ・学期1回程度の意図的な情報交換の場の設定を目標とした。しかし、これは多忙さなどから年1回となってしまった。

○成果と今後の課題

- ・成果としては、子どもたちの体験の幅が広がり、意欲的に活動できる場面が増えたこと、特別支援学級の子どもたちと通常学級の子どもたちとの交流が増えたことがあげられた。特に、年下の児童との交流の方がより意欲的に活動できるという発見もあった。
- ・今後の課題としては、子どもの実態の共有をさらに進めること、特別支援学級の子どもたちと通常学級の子どもたちの双方にとってねらいが達成できる活動をさらに模索していくこと、良かった活動を蓄積していくこと、保護者へも活動の様子を伝えて

いくことなどがあげられた。

研究協議

小グループを作り、各学校での交流教育の実践、難しさ、学習ボランティアへの先生の希望（してほしいこと、してほしくないこと）などが話し合われた。

○ごっこ遊びより具体物の効果

- ・「郵便屋さん」として本格的に活動したことが子どもたちの力を伸ばす上では良かった。
ハロウィンの行事なども、商店街などに協力をお願いし、実際に交流するほうがごっこ遊びより効果が大きい。
- ・地域との交流のためには、地域の力と管理職の協力も大切である。校長先生が熱心であり、地域に出ていってもよいのではないかとの姿勢があったので、さまざまな機会に交流しやすいということがあった。

○子どもたちの集中力を高めるためには

- ・特技や好きなことを大切にし、一緒に活動することで広がっていくことを感じること、子どもが安心できる空間を作るのを認めること、子どもと相談しながら進めていくことなどが重要ではないかと思う。

指導助言

指導助言者 東部教育事務所指導主事 井上弘江

○子どもを中心として

- ・ある会社では、この子はこういうことならできるという視点で考えて、その子に合わせて場所を作ってくれる。生まれてから就労までをなかなかみるということがないが、その子どもを中心として考えていくことが重要である。
- ・生活単元の学習では、ごっこ遊びではなく活動できることはやはり大切である。責任感を持つこと、様子や状況を見ることなどの体験を積み重ね、生活していくときに自分が要求するものがわかること、誰かに助けを求めることができるようになることが大切である。

○適材適所

- ・子どもの得意なこと、これを任せたら大丈夫ということを生かしていく。そして、ときどきは困難なことを入れることが子どもの集中力や発達を促すことにもなる。

○通常学級との連携

- ・担任の先生に週予定表を渡すことは連携にあたってはとても大切である。

○保護者との連携

- ・「おらが学校」…お互いの受け取り方、考え方の違いはあっても、やりたいと思ったら積極的に関わっていくことが大切である。

指導助言

小学校・中学校分科会 基礎講座

指導助言者 埼玉純真短期大学教授 牛込彰彦

発達障害における「薬物療法」について

- ・発達障害について理解し、それに応じた環境を整えることが本人の「生きづらさ」を軽減するためには必要であり、「薬物療法」は「生きづらさ」を軽減するための一つの方法である。
- ・服用にあたっては、医師と十分に相談する必要がある。服用による本人の変化は、周りの保護者や教員が一番理解しており、保護者は家庭内での個人としての症状を知ることができ、教員は集団の中での個人の症状を相対的に知ることができるため、効果的な服用のためには本人の症状の変化の情報を医師に提供していくことが重要である。
- ・発達障害に使用されることのある薬の1つである「コンサータ」の薬品ガイドなども参考に。
- ・その子どもの状態を適切に把握し、必要なときはセカンド・オピニオンなども利用しつつ、環境を設定していく。

○交流にあたって

- ・先生同士の間で要望を依頼しあうことができるかどうか、内容などについてコミュニケーションをとることができるかが重要になる。

○社会に出る前の学習

- ・通級学級は社会に出る前の学習を行う場でもある。相手に伝えるにはどうしたらよいかといったことを、活動を通して子どもたちに具体的に伝えていくことも必要である。

○声かけの一貫性の確保

- ・支援者同士がコミュニケーションをとり、子どもたちに一貫した声かけを行うこと、子どもたちをほめること、言葉だけに頼らず紙芝居や画像などを活用して伝えていくことが大切である。

基礎講座、実践報告を受けての参加者による協議では、参加者の日頃の実践や実践の中での悩みも共有され、活発な意見交換が行われた。子どもたちへの支援のあり方について、さまざまな立場からの考え方、思いにふれることができ、日々の実践を振り返る貴重な機会となった。

(文責 埼玉純真短期大学 金子恵美子)

第3分科会 「音楽」 音楽を取り入れたより良い指導の工夫
基礎講座

埼玉純真短期大学 小澤和恵

オペレッタ上演を通して育まれる
表現力と人間性

指導助言者
埼玉純真短期大学
小澤 和恵

「表現発表会」の目的

表現力と創造性を高め、
さらに協力し合う姿勢を養い、
幼児教育者としての資質を
高めていくこと

1. はじめに

「保育内容応用指導法」という授業
でオペレッタに取り組み、
羽生市産業文化ホールで行われる
「表現発表会」で上演



2. オペレッタに取り組んだ理由

- ・オペレッタは、保育内容5領域の発展的、横断的、総合的表現活動であり、「保育内容応用指導法」の授業で取り組む内容としてふさわしい。
- ・表現力や創造力を豊かにし、協調性が養われ、「表現発表会」の目的を達成できる内容としてもふさわしい。

「保育内容応用指導法」とは…

保育内容5領域に対応した発展的指導法、
横断的、総合的指導法を学習する授業

保育内容(環境)指導法
保育内容(人間関係)指導法
保育内容(言葉)指導法
保育内容(健康)指導法
保育内容(表現音楽)指導法
保育内容(表現造形)指導法
保育内容(身体表現)指導法

3. オペレッタ上演から何を学ぶか

擬似体験から得られる大切な感情や言葉

擬似体験する中で感性が育まれ、創造力がかきたてられ、
表現力を豊かにすることができる。一言のせりふやワンフレーズの歌、それに伴う動きが、優しさや強さなどの様々な感情を湧き立てる力をもっており、この感情こそが表現の源となっていくと考える。

例)

「こうし」でのセリフ
「父ちゃんと母ちゃんの子で良かった」

「花さき山」でのセリフ
「辛抱するよ」「手伝うよ」

「自分のことより人のことを思って、
そのやしさとけなげさが
こうして花になって咲き出すのだ」



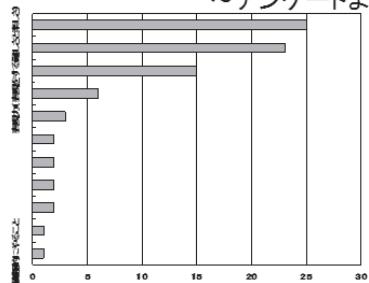
「花さき山」

協調性・社会性

協力してひとつの作品を作り上げる過程
の中で、自己を主張する力と他者を理解す
る力が養われる。

協調性・社会性を高めながら、問題解決能
力や課題遂行能力を身につけ、しいては人
間性を磨く良い機会となっていく。

4. この表現の中で得たものは何ですか ～アンケートより～



認められる喜びと自信

人の前で発表するという体験、そして
観客からの反応や拍手は何より自信
となり、人から認められるという心地よ
さは、生きている力や喜びにつながつ
ていくと期待できる。

今までに上演した作品

「うばすて」(日本昔話・永山友美子台本作曲)
「100万回生きたねこ」(佐野洋子原作・永山友美子台本作曲)
「べろ出し・チョンマ」(高藤隆介作)
「こうし」(新美南吉作 永山友美子作曲)
「花さき山」(高藤隆介原作・永山友美子作詞・作曲・脚本)
「きつねのおきゅくさま」(あまんきみこ作・音楽物語研究会編集)
「やさしいひんじゆうじん」(西本鶴介原作・永山友美子台本作曲)
「貝の火」(宮沢賢治原作・永山友美子台本作曲)



「こうし」

第3分科会 「音楽」 音楽を取り入れたより良い指導の工夫

ライオンキングの魅力

～音楽で生徒を育てる～

提案者 埼玉県立特別支援学校羽生ふじ高等学園教諭 松澤ゆかり

第3分科会「音楽」

音楽を取り入れたより良い指導の工夫

ライオンキングの魅力

～音楽で生徒を育てる～

埼玉県立特別支援学校羽生ふじ高等学園
教諭 松澤 ゆかり

音楽のねらい



「自分で表現する
喜びを味わい、
心と身体の
充実を図る。」



羽生ふじ高等学園

- ・軽度の知的障がいある生徒が通う。
- ・一般就労100%を目指している。
- ・週の半分(15時間)は専門教科を学習。



ライオンキングの魅力

- ・サークルオブライフ“生命の連環”は生徒達に生きる喜び、自然の偉大さを感じさせてくれ、勇気と希望を与えてくれる。
- ・生徒達が成長していく上で必要な希望、挫折、友情、孤独、愛など色々なメッセージが含まれている。
- ・アフリカンビート、ロック、タンゴなど世界各地の刺激的なメロディで構成されている。
- ・声、身体、楽器など様々な方法で表現でき、生徒一人一人の内面を引き出し、生かしていくことができる。



本校の生徒

- ・明るく素直。
- ・一生懸命に取り組む。
- ・心や身体に生きにくさを抱えている。



単元のねらい



- ・協力校との合同ステージ発表を通して、みんなで一つの物を作り上げる達成感や成就感を味わうことができる。
- ・人前での発表を通して表現力を高め、人に感動を与えられる感性を身に付けていく。

ライオンキングの取り組み

全校生徒+協力校(羽生高校、羽生一高、誠和福音高校)による歌と表現
全12曲約45分 歌、ダンス、楽器、ソロ、デュエットなど

キプロローグ(音楽部)

- A 1. サークルオブライフ(全体)
- 2. 朝の報告(2・3年)
- 3. 王様になるのが待ちきれない(全体)

C7. スカー王の狂気(3年)

- 8. シャドウランド(ソロ+2・3年)
- 9. 終わりなき夜(ソロ+2・3年)

B 4. 食っちまえ(2・3年)

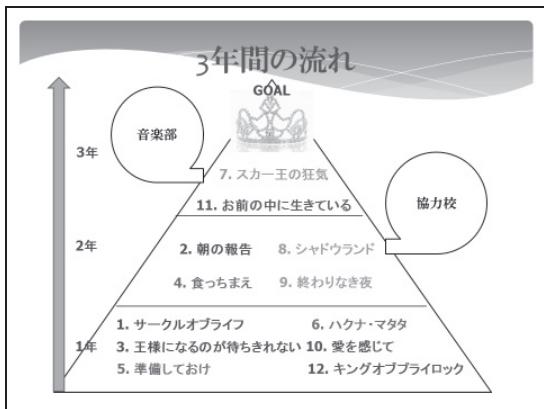
- 5. 準備しておけ(全体+ダンス)
- 6. ハクナ・マタタ(全体)

D10. 愛を感じて(ソロ+全体)

- 11. お前の中に生きている(3年)
- 12. キングオブブライロック
～サークルオブライフ(全体)

①集中力を高める♪サークルオブライフ♪

集中力、意欲、態度、行動力
姿勢保持、呼吸機能の向上



②心を開放する♪朝の報告♪

他者との関わり、集団への参加の基礎を築く

自立活動の観点(働くために必要な力として)

心理的な安定;障がいの受容及び障がいに基づく困難を改善
克服しようとする意欲、態度、行動力

1. 健康の保持;呼吸機能の向上、体力、健康の保持
2. 心理的な安定;自己表現、情緒の安定、自信、意欲、態度、行動力
3. 人間関係の形成;他者との関わり、集団への参加の基礎
4. 環境の把握;動作模倣、耳と手の協応、周囲の状況、把握
(イメージする力)
5. 身体の動き;姿勢保持、運動・動作の基本的技能
6. コミュニケーション;発声、発語、動作、感情表現

③表現方法を学ぶ

自己表現、情緒の安定、自信、意欲

子どもの思いに寄り添う実践
～音楽を取り入れたより良い指導の工夫～

④身体の動きを学ぶ♪準備しておけ♪

動作模倣、運動動作の基本技能、
ボディイメージの広がり

⑤自信をつける♪スカー王の狂気他♪



自信、意欲、態度、行動力

最後に

- ・ダイヤの原石をダイヤモンドに
- ・歌声の響く学校
- ・子供達の力を引き出す選曲
- ・余計なものは取つ払う
- ・自ら学ぶ、共に学ぶ
- ・学んだことは必ず評価
- ・音楽で生徒を育てる
- ・音楽は一流に



⑥人と合わせる♪愛を感じて♪



運動・動作の基本的技能

共に生きる

自信を持って生きていける力を身に付ける。



そして、一人の人間として生きていく。

⑦困難を克服する ♪キングオブプライドロック♪



発声、発語、動作、感情表現

♪世界に一つだけの花 一人一人違う種を持つ♪



♪その花を咲かせることだけに
一生懸命になればいい♪

⑧互いに学び合う



障がいの受容及び障がいに基づく困難を改善
克服しようとする意欲、態度、行動力

11月22日(土)第8回羽生ふじ学園祭



2時30分～
ライオンキング
是非いらして
下さい！！

ご静聴
ありがとうございました。



第3分科会 「音楽」 音楽を取り入れたより良い指導の工夫

「協議の内容」

提案者からの実践報告

ライオンキングの魅力～音楽で生徒を育てる～

埼玉県特別支援学校羽生ふじ高等学園教諭 松澤ゆかり

軽度の知的障害のある生徒が通っている羽生ふじ高等学園でのミュージカル「ライオンキング」を3年間通じて生徒が取り組んでいる実践の報告がされた。パワーポイントによる発表に加えて、実際の映像で授業での生徒の学習の様子や本番のパフォーマンスを観ることができた。

ライオンキングに取り組むことで生徒は、①集中力を高める、②心を開放する、③表現方法を学ぶ、④身体の動きを学ぶ、⑤自信をつける、⑥人と合わせる、⑦困難を克服する、⑧互いに学び合う、ということを学んでいる。またライオンキングの中で使っていた楽器（メロディーパイプ、レインスティック、カスタネットなど）の紹介も行なわれた。

指導助言

指導助言者 発達支援教室ビリーブ代表・文教大学講師 加藤博之

音楽は音が合うと心地よい、合わないと違和感がある。例えば、帰りの歌で子どもたちは気持ちの整理がつく。またお片づけの歌を聞くと子どもたちが自然と片付けたくなる。言葉だと強制的な感じがあっても音楽だと強制的なことが薄い。でもやりすぎると音楽で子どもを動かしているようになってしまう。

また手の動きを司るところは言語のところに近いので手遊びは言語の発達にも有効である。模倣が難しい子どもは強制をしないほうが良い。手を持ってやらせるのではなく、手をつないでやってやると良い。ただしいつでも離して良いという気持ちで繋ぐことが大切。

指導助言

「オペレッタ上演を通じて育まれる表現力と人間性」

指導助言者 埼玉純真短期大学教授 小澤和恵

本学で毎年、表現発表会を実施している。その関連授業として「保育内容応用指導法」があるが、その授業と保育内容の5領域の授業との位置づけについての説明がされた。それを踏まえて、オペレッタは総合的な表現活動だと思うので応用指導法に取り入れている。

オペレッタの上演という疑似体験を通じて学生は台詞やフレーズによって色々な感情を沸き立たせ、それが表現の源であると考えている。

また学生は協調性、社会性、問題解決能力、課題遂行能力といったものも身につけていく。そして、他者に認められる喜びや自信もオペレッタを通じて感じている。

は最初からこうするのよと言わないで、好きに（ただし危険がないように）させてよい。

水笛だと子どもは一生懸命吹く。息を強く吹くことが、言葉の発達が遅い子に良い。

最後に、参加者全員が一つずつ楽器を担当して「風になりたい」を演奏しました。

(文責 埼玉純真短期大学 安倍大輔)

1. 発達障害を抱える子どもに対する、高校で必要な支援について

- 1) 「高校で必要な支援」とは何か
- 2) 高校での問題はそれまでの幼小中での問題が持ちこされている場合がある
- 3) 思春期～前青年期の時期という発達的な視点の必要性
- 4) 環境としての家庭の協力が不可欠

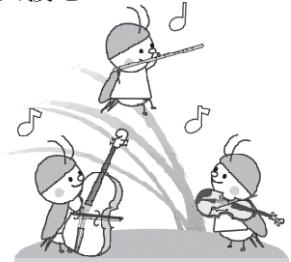
2. 発達的な視点で見た、高校時代について

◆思春期～青年期＝自立と依存の葛藤・・・定型発達と比べると多少の遅れはあるが、青年期特有の悩みや問題を抱えている

- 1) 心身の劇的な成長の時期・・・身体と心の成長
- 2) 依然として支援が必要な時期・・・生活面での課題がある場合、程よい距離で見守る
- 3) 自立へ向かう時期・・・10年後を見越した支援。「将来」も含めて支援を

3. 思春期～青年期特有の問題

- 1) 性的な問題が表面化、性的な発達も伴い、誰でも混乱する時期
- 2) 自己像を確立する時期
- 3) 障害の受容と自立の葛藤



4. 発達障害から精神疾患の枠組みでの理解と支援

◆発達障害ではなく、適応障害、パーソナリティ障害、コミュニケーション障害という枠組みに入る・・・対人関係の問題、パーソナリティの問題がクローズアップ

◆重ね着症候群(layered-cloths syndrome)

16歳以上で、知的障害はない。種々の精神症状、行動障害を主訴に、背景には、自閉症スペクトラム症が存在する。高い知能のため達成能力が高く、就学時代は発達障害とみなされていない。一部に、小児期に不登校や神経症などの既往があるが発達障害を疑われていない。課題達成能力は高い。恐怖症・分離不安・不登校等の神経症症状が現れることがある。

5. 障害をもったまま地域で暮らす方法を考える

◆ボトムアップではなく、トップダウン・アプローチ

出来ないことを出来るようにして地域に出るのではない。限られた能力のままで、地域で暮らすための工夫

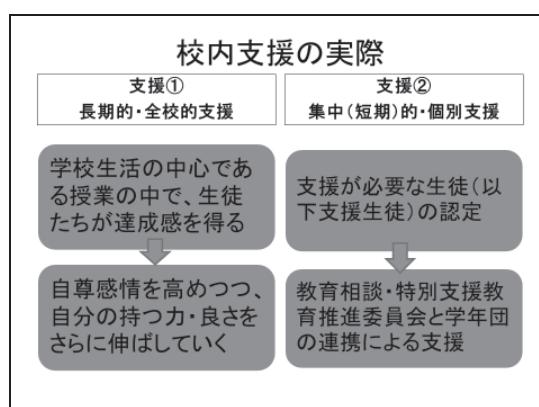
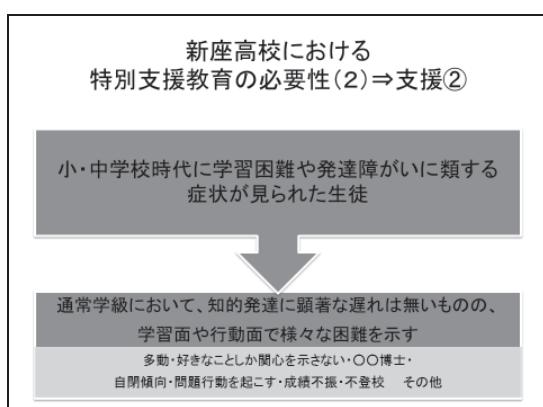
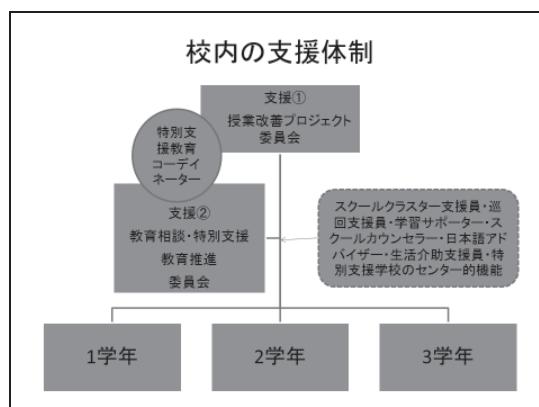
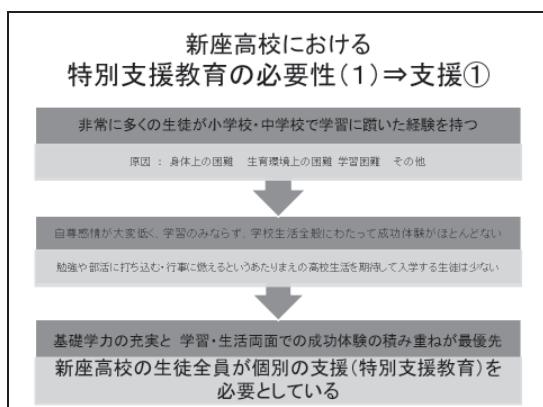
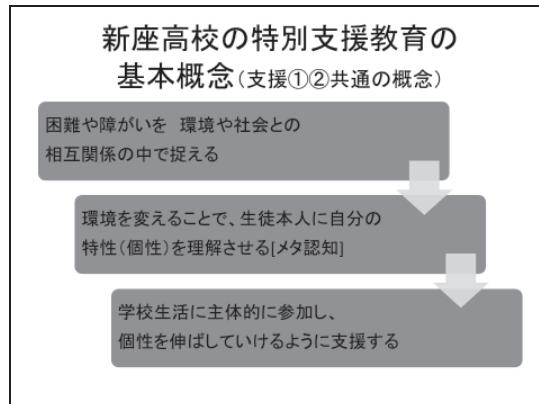
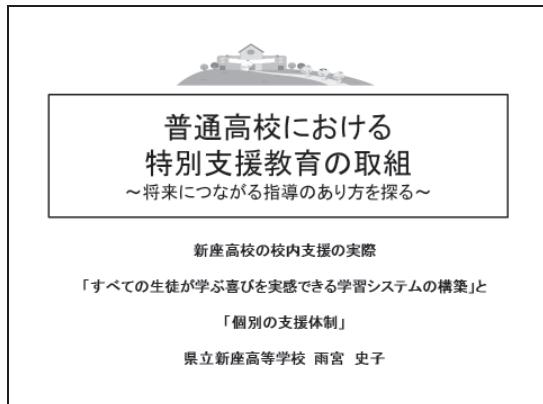
<トップダウン的発想の例>

- ・A D H Aの場合、働く場での刺激を整理、改造
- ・職場で現場を貫く職業選択。マイペースで、ルーティーンワーク、部下を持たないなど

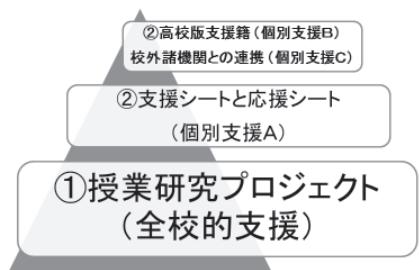
第4分科会「高等学校」 将来につながる指導のあり方

普通学校における特別支援教育の取組 ～将来につながる指導のあり方を探る～

提案者 埼玉県立新座高等学校教諭 雨宮史子



新座高校の特別支援教育



平成26年度新座高校 「共生社会を支える特別支援教育推進事業 公開講演会・研究協議会」

7月3日(木)13:30~16:00

I「講演会」

講師:巡回支援員 坂元 直子先生

テーマ:「生徒の何をみるのか

～気になる生徒に気付けるようになるには～」

II「研究協議会」(事例研究ワークショップ)

授業中の対応と支援方法

支援① 授業改善プロジェクト(授業改善PJ委員会)

授業の中で生徒の良さを伸ばし、学力向上をめざす

授業公開:年7回

各学年1クラスを公開し授業での生徒の様子を観察し、情報を共有する

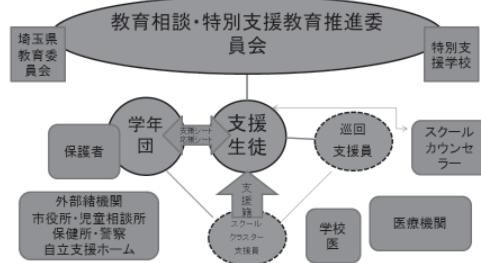
授業検討会

授業者と参観者全員が、授業での生徒の学びについて発言して意見交換する(各学年団中心)

学習サポート(早稲田大学と連携)

↓
授業内サポート+補習

支援② 支援生徒への個別対応 学校が生徒の支援の中心を担う



○平成26年度授業改善プロジェクトのテーマ 特別支援の視点で生徒一人ひとりを捉え、

(ア)生徒自身がメタ認知*を活性化できるような支援を工夫する

*メタ認知=自分の理解の仕方やつまづきに気づき、修正や解決の方法を見出す能力

①授業でペアやグループ活動・振り返りシートなどを活用し、生徒のメタ認知活動を支援する

②生徒が次の目標を見定め、取り組みの見通しを立てられるような活動を授業に取り入れる

(イ)生徒の理解の仕方に応じて各教科の特性を活かした指導の工夫をする

《具体的な手法》

①視覚理解が優位→図・絵・DVD・プロジェクター・実物を活用

②聴覚理解が優位→音声教材を利用したり発音・音読指導を取り入れる

③運動による理解が優位→ロールプレイ・実演・発表などの活動を取り入れる

支援②-(A) 授業内での支援の実践 新座高校版<個別の支援/指導計画>

支援シート

- 巡回支援員の先生による授業観察と、教員団とのカンファレンスを経て作成
- 支援生徒に関する専門的な見立てが書かれている
- 自己理解に必要な情報を共有し、対応のヒントとして活用する

応援シート

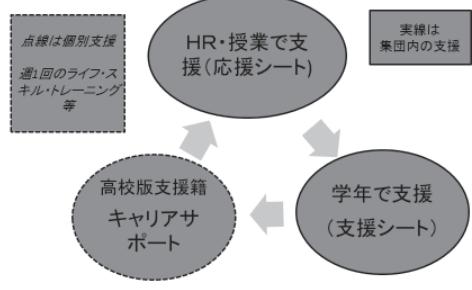
- キーパーソン(担任あるいは学年団)が作成
- 授業中の具体的な支援(長期目標・短期目標・評価目標を設定)
- 自己理解が深まった段階では支援生徒と相談して作成
- 定期的に達成度を振り返る

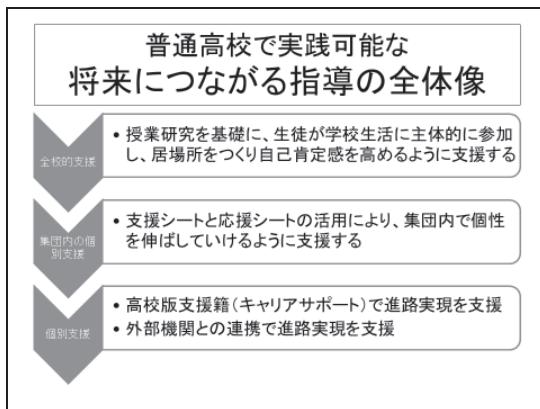
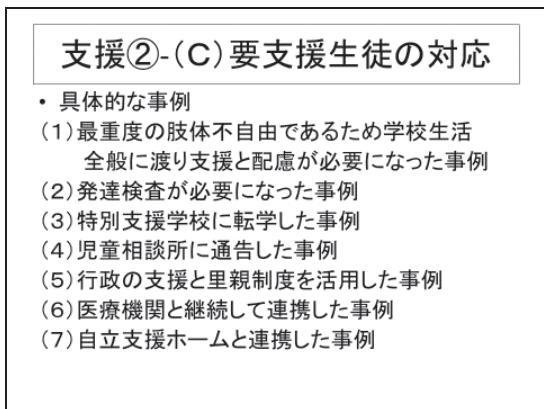
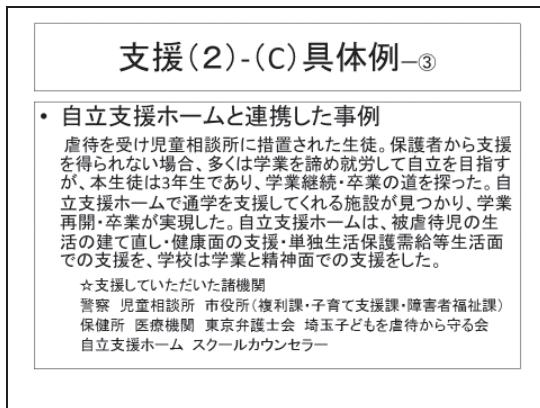
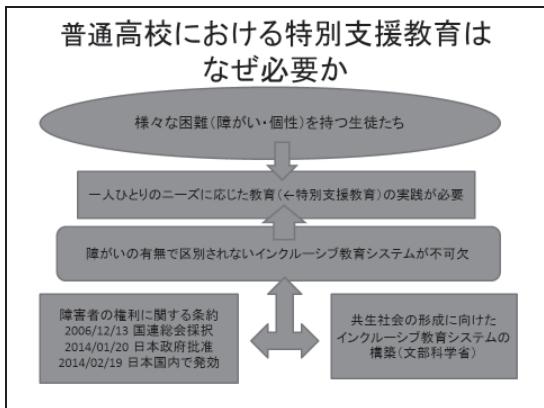
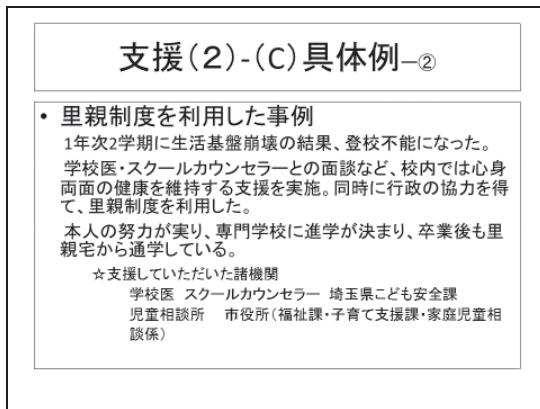
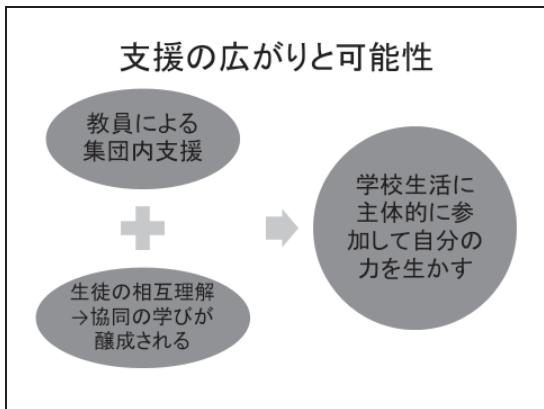
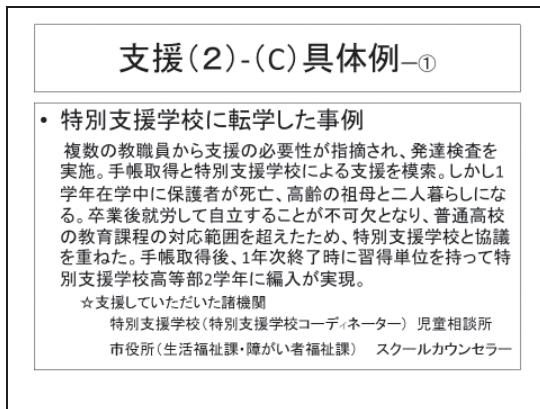
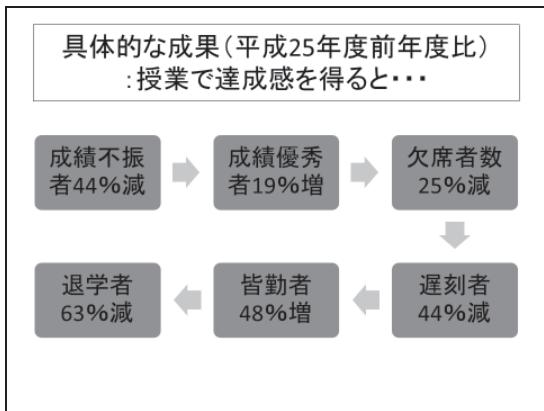
平成26年度 教育相談・特別支援教育研修会

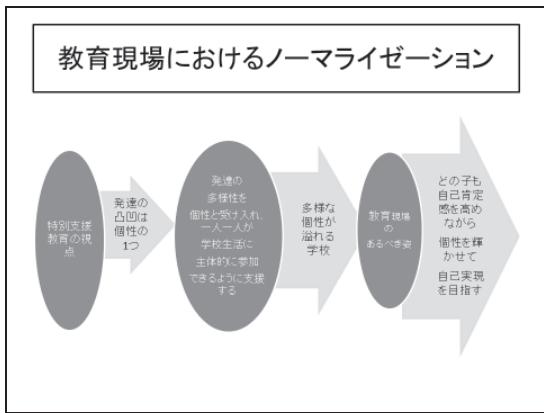
4月7日(月)9:00~10:30 於 本校会議室
講師:共栄大学教育学部教授 和井田節子氏
テーマ:特別支援教育の視点を取り入れた指導支援の勧め

↓
特別支援教育とは教育対象の拡大
(一人一人のニーズに応じた教育の実践)

支援②-(B) 高校版支援籍 キャリアサポート







第4分科会「高等学校」 将来につながる指導のあり方

「協議の内容」

I. テーマ 「将来につながる指導のあり方」

II. 会の流れ

1. 学生による、提案者、指導助言者、司会の紹介

2. 参加者の自己紹介（本分科会を志望した理由等含む）

3. 「高校で必要な支援について」【埼玉純真短期大学准教授 稲垣馨】

①発達障害を抱える子どもに対する、高校で必要な支援について

②発達的な視点で見た、高校時代について

③思春期～青年期特有の問題 ④発達障害から精神疾患の枠組みでの理解と支援

⑤障害をもったまま地域で暮らす方法を考える

4. 「普通高校における特別支援の取組～将来につながる指導の在り方を探る～」

【雨宮史子】

①新座高校における支援体制

新座高校の生徒全員が個別の支援を必要としているととらえる

②新座高校特別支援教育の基本概念

困難や障害を環境や社会との相互関係でとらえる。

環境を変えることで、生徒本人に自分の特性（個性）を理解させる（メタ認知）。

学校生活に主体的に参加し、個性を伸ばしていくように支援する

支援シートと応援シートの活用

③新座高校の支援 支援1…生徒たちが授業の中で達成感を得る→自尊感情を高める

* 授業改善プロジェクト（授業公開を通して生徒の様子を観察し、情報を共有する・
授業者と参観者全員が、授業での生徒の学びについて意見交換する）

支援2…教育相談・特別支援推進委員会と学年団の連携による支援

④具体的な成果（前年比）…成績不振者 44% 減、成績優秀者 19% 増、皆勤者 48% 増
欠席者数 25% 減、退学者 63% 減、遅刻者 44% 減

⑤支援の広がりと可能性…教員による集団内支援、生徒の相互理解→協同の学びが醸成される、学校生活に主体的に参加して自分の力を生かす

⑥普通高校で実践可能な将来につながる指導の全体像

* 発達の凸凹は個性の一つ⇒多様な個性が溢れる学校

⇒どの子も自己肯定感を高めながら個性を輝かせて自己実現を目指す



教育現場におけるノーマライゼーション

（文責 埼玉純真短期大学 細田香織）

第4分科会「高等学校」 将来につながる指導のあり方
指導助言

将来につながる指導の在り方
指導助言者 埼玉県教育局特別支援教育課指導主事 山下理恵子

埼玉純真短期大学

平成26年10月25日(土)

第4分科会：高等学校

将来につながる指導の在り方

特別支援教育課 山下 理恵子

1 高等学校の支援の場面でよく見かけるケース

- (1) 学習面のつまづき (2) 生活上のつまづき (3) 二次的な課題
- (4) 問題行動 (5) 進学・就労への不安 (6) 対人関係のつまづき

2 特別な教育的支援を必要とする生徒への支援で考えること

- (1) 一人一人への対応（特性の理解と特性に応じた指導・支援）
- (2) すべての生徒が安心して学べる学級・授業
 - リーフレット「特別支援教育の視点を生かした授業・学級経営」(平成26年3月)
(<http://www.pref.saitama.lg.jp/uploaded/attachment/613176.pdf>)

3 共生社会を支える特別支援教育推進事業における取組

国の動向・・・「障害者の権利に関する条約」を批准 (H26年1月 2月発効)

- ・中央教育審議会報告 (平成24年7月23日)
- ・学校教育法施行令の一部改正 (平成25年9月1日施行)
- ・障害者差別解消法 (平成28年4月1日施行予定)



共生社

の形成を目指し

インクルーシブ教育システム

構築の理念を踏

まえた特別支援教育を推進する。

4 高等学校における特別支援教育のポイント

- (1) 特性の理解と特性に応じた支援の充実
 - 校内研修の推進 専門家による巡回支援の活用 特別支援学校のセンター的機能の活用
- (2) 組織的な取組の推進
 - 校内組織の整備 情報共有ツールの活用 個別の教育支援計画・指導計画の作成
- (3) 授業改善の工夫
 - 具体的な説明と提示 グループ学習 情報量の調整
- (4) 進学・就労への支援
 - 関係機関との連携 個別の教育支援計画・指導計画の活用

5 将来につながる指導

- 特性に応じた指導・支援の充実を図る。
分かりやすい授業、安心できる集団、プランニング、キャリア

○本人の自己理解を支えていく。

よさや得意なことへの気付き、苦手さを解決する方法、こうすればできるという方法
ヘルプスキル

○二次的な障害を防止する。

肯定的な働きかけ、成功体験、自己肯定感の醸成

○本人・保護者との共通理解に基づいた支援の充実を図る。

保護者は共に支援を行うパートナー、個別の教育支援計画やサポート手帳の活用による一貫した支援

第4分科会「高等学校」 将来につながる指導のあり方

全体討論・まとめ（今後の課題）

- ①高校では学習面のつまづき、生活上のつまづき、二次的な課題、問題行動、進学・就労への不安、対人関係のつまづきが問題となることが多い
- ②特別支援に対する教員の意識の高まりと横のネットワークの広がりの必要性が急務—可能性を秘めている
- ③自己理解を深め、卒業後に進学、就労するイメージを高めることが重要—将来につながる支援

（文責 埼玉純真短期大学 稲垣馨）

第5分科会 「特別支援学級・特別支援学校・通級指導教室」 専門性を活かした指導
基礎講座

埼玉純真短期大学 伊藤道雄

1、インクルーシブ教育システムの構築

平成26年1月20日、日本においても「障害者の権利に関する条約」の批准書が国際連合事務総長に寄託され、2月19日より発効された。

平成24年7月に中央教育審議会初等中等教育分科会から示された「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」では、①「共生社会の実現に向け、誰もが相互に人格と個性を尊重し合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える社会を目指す」こと、②障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり、障害のある者が排除されないこと、③自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、④個人に必要な「合理的配慮」が提供されることが必要とされている。また、⑤同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して、自立と社会を見据えて、その時点で教育ニーズに最も的確に応える指導を提供できる多様で柔軟な仕組みを整備すること、⑥通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった連続性のある「多様な学びの場」を用意する必要があると述べている。

2、通常の学級での教育の工夫

- ・学級経営の重要性

学級経営を基盤として、授業の充実があり、行事の実施が図られる。

- ・授業のユニバーサルデザイン

参加・理解・習得・活用

3、特別支援教育の充実

- ・通常の学級を念頭に置く
- ・通常の学級での学習の場を検討する（交流及び共同学習を含む）
- ・特別支援教育は「合理的配慮」のモデル
- ・特別支援教育の充実と分かりやすく明確な説明

4、学校（園）あげての特別支援教育の推進

- ・推進体制の整備

「どの子も学校の子、みんなが資源・みんなで支援」

- ・自尊感情を高める指導

「人に適切に援助を求める力、あなたならどうする・セルフ・エスティーム」

第5分科会 「特別支援学級・特別支援学校・通級指導教室」 専門性を活かした指導

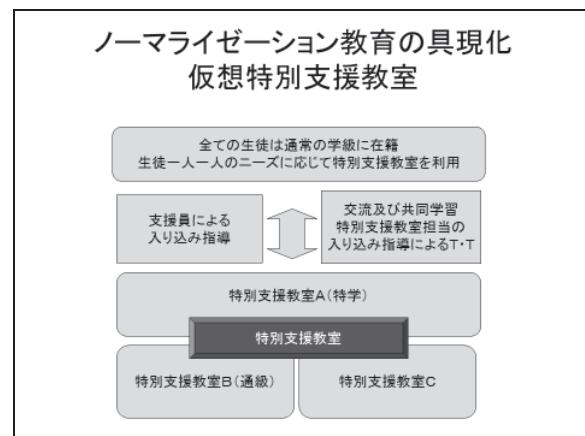
生徒主体の支援を！
卒業生とともに3年間の学びを振り返る

提案者 熊谷市立富士見中学校教諭 三富貴子
熊谷市教育委員会指導主事 森香明
熊谷市立大麻生小学校教諭 橋爪恵里子
本人・保護者 新井麻衣良・俊江

生徒主体の支援を！
卒業生とともに
3年間の学びを振り返る



埼玉県熊谷市立富士見中学校
発達障害・情緒障害通級指導教室
三富 貴子・新井麻衣良

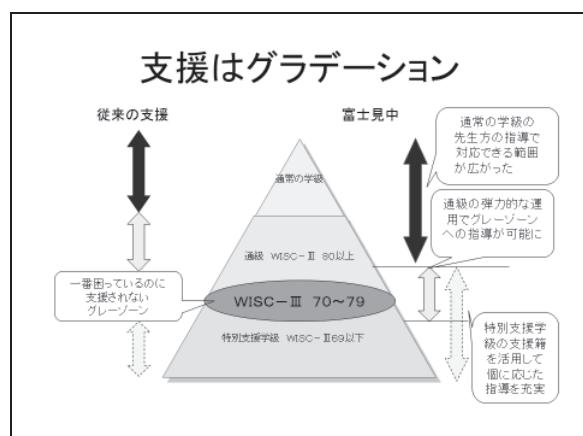


文部科学省指定研究開発学校
3年間の取り組み

• 研究課題
発達障害を含む障害のある生徒や学校生活に不適応を示す生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程の編成及び指導の在り方に関する実践的な研究

「みんなが資源みんなで支援」
困っている 全ての生徒へ 分かる支援を！

- 個別支援対象者の決定から
個別の指導計画立案まで
- ①学年会で個別支援が必要な生徒をピックアップ
 - ②校内支援委員会で協議
 - ③承認を受けた生徒の支援について学級担任と特別支援担当が話し合いを行う
 - ④生徒の実態把握(面談、WISC-III、アンケート等)
 - ⑤個別の指導計画立案
 - ⑥指導開始
校内支援の場合、毎日担任や教科担任と話している。変更があれば、指導計画に加筆していく。



- 無理のない 個別の指導計画
忙しい先生方の負担感を無くすための工夫
- シンプルな形式 (別紙参照)
A4のシートに必要な情報の全てが入るようにした。
 - パソコンでデータ管理
クラス毎にファイルを作つて個別の指導計画を保存し、いつでも誰でも見られるようにした。
 - 変更はいつでも加筆
年度当初書いたら終わりではなく、いつでも修正できるようにした。(パソコン上なら簡単)
 - 一緒に書く
在籍学級の担任と通級担当が一緒に書くことで無理なく作成することができた。

支援の方法は 本人の希望を最優先で決める

支援方法の選択

- ・抽出指導
- ・通級担当による入り込み指導
- ・支援員による入り込み指導
- ・通級教材の使用
- ・放課後の抽出指導
- ・休み時間のリラックス

※校内資源を最大限に活用する。

生徒のニーズに
応じた多様な
学びに対応する
様々な方法。
ちょっとした知恵
と工夫。そして発
想の転換。

評価について

- ・本人の願いを通常の学級でいかに達成させるか。
- ・そのために通級で何を指導するのか。

↓
本人、担任(教科担当)、通級担当で何度も話
し合いを行う。

↓
個別の指導計画へ反映

配慮が必要な生徒の特性に応じた オーダーメイドカリキュラム

- ・個別の支援計画に基づき、一人一人に応じたカリキュラムを作っていく。
- ・時間割づくりでは、生徒と話し合いながらコマを埋めていく。

→大人が時間割を決めるのではない。
学びの主役である「生徒の意思」を最大限に尊重する。

共同成績評価 インクルーシブな教育環境でよく使われる方法

- ・通常の学級担任、教科担任と、特別支援教育担当が個別の指導計画をもとに合議の上成績を決定する。



特別支援教育担当が通常の学級の評価システムを理解する必要がある。

日報

10月29日(金)

行事	特学	A	B	C	D	E	五十嵐	町田	三喜
1 生活	通級 課題実習	生活	理科	通級 課題実習	社会科	1-3 T2	課題実習	課題実習	
2 学活	通級 課題実習	理科	選択各	通級 課題実習	保健		通級 課題実習	A D	A D
3 生活	通級 課題実習	数学	通級 課題実習	通級 課題実習	通級	3-2 T2	A D	A D	C C
4 生活	3-5 図鑑	英語	保健	特別C 保健室	理科				
	通級	1-5	2-6	通級	2-2		通級	通級	
5 床体	下校	総合E	総合E	合同床体	総合E	合同床体	運動	合同床体	
6									
○									

指導の実際 まいちゃんの3年間の学び



The image consists of two parts. On the left, a photograph shows students in graduation gowns at a school entrance ceremony. On the right, a large speech bubble contains Japanese text. The text discusses the importance of a smooth start to the new school year, mentioning the first day of school, the importance of safety, and the support of the Fuji見中 (Fuji Mijima) community.

入学式前日
安心して入学式に参加するために

4/10(土)は富士見中学校の入学式の日です。
私は中学生になります。私のクラスは
1-4です。

入学式までにやること
①クラス名と担任を確認し、自分の名前を覚える。
②各自の「付近図」の市町くにつをしまって
うわが町にさきがけ。
③4歳の自分がううごに行く。
④次の日に夏祭りにて静かに待つ。
⑤先生に挨拶をよく聞く。
私の担任の先生は

（） べせんせい
野辺先生
困った時は助けてあ
げるからいいじょう
いふ安心してね。

先生と一緒に軽くから体操へ参加する。

富士見中で学ぶ
スタートの日を
無事に過ごすことが
できるように
心をこめて支援します。

絵を描くことが大好き。
大好きなオードリーが
勇気をくれる！ 今も好
きらしい。。

うわわ手帳に共感



小学生が書いた本。
中学生版を是非
まいちやんに
作って欲しい。

特別支援教室A 合同保体

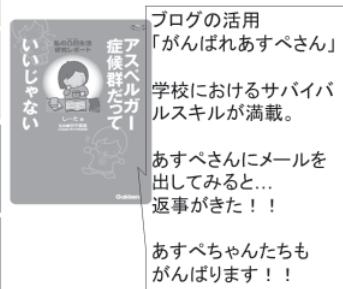


研究授業で
取り組んだ剣道。
竹刀を初めて
振りました。

大人のあすべさん



大人のあすべさんが綴る体験談



ブログの活用 「がんばれあすべさん」

学校におけるサバイバルスキルが満載。

あすべさんにメールを
出してみると…
返事がきた！！

あすべちゃんたちも
がんばります！！

1年生 修了式に参加



担任の先生に支えられ、
集団の中に入ることが
できました。

学力向上支援員との連携



国語の授業の前に
リハーサル。不安を解
消していきます。

体育祭に参加するまで



一、二年生までは、
「開閉会式に参加する」
を目標にしていました。

体育祭 綱引きに参加



三年生の体育祭は
最後のメインイベント
綱引きに参加！
が参加することに意義
があります。



特別支援教室Aとの交流 テーブルマナー



特別支援教室で
学んだ生徒達と
みんなで
テーブルマナー。
たくさん思い出が
できました。



笑顔の卒業式





人との関わりを拒絶する

- 学校や教員を信用しない→大人への不信感
「先生はいつもできることを怒り、みんなの前で馬鹿にした」
- 「あの子は小学生程度なんだからみんなで助けてあげなくちゃダメよ」
- 引きこもり
- 非行
- 高校中退

私達の教え方で学べない子には その子の学び方で教えよう

- 大切なのは、困っているのは子ども達であるということ。
- 学習を絶対に諦めさせない。高校へつなげる。高校で生まれ変わる生徒も多い。
- 個別の指導計画は高校へ引き継ぐ。
- 成功体験を増やし、自信を回復させ再び学習にチャレンジできるよう支援する。
- 通級は学びの保健室。
アメリカのリソースルームのイメージで。

発達障害・情緒障害通級指導教室 対象生徒

- 平成18年3月31日 文部科学省の通知より
- ア 自閉症者
自閉症又はそれに類するもので、通常の学級での学習におおむね参加でき、一部特別な指導を必要とする程度のもの
 - イ 情緒障害者
主として心理的な要因による選択性かん默等があるもので、通常の学級での学習におおむね参加でき、一部特別な指導を必要とする程度のもの
 - ウ 学習障害者
全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示すもので、一部特別な指導を必要とする程度のもの
 - エ 注意欠陥多動性障害者
年齢又は発達に不釣り合いな注意力、又は衝動性・多動性が認められ、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすもので、一部特別な指導を必要とする程度のもの

今、中学校で何が起こっているか

- 学力低下
- 非行 授業徘徊
- いじめ
- 家庭内暴力
- 不登校 等々



学習の遅れが、様々な問題行動を引き起こす大きな要因の一つとなっている。

中学校で崩れた生徒のその後は...?

教室に入ることができない 不登校や非行は誰が支援するのか？

今のシステムでは誰も支援できない。

生徒は待ってくれない。

支援されずに、行き場を失って崩れていく。

学校でできることは？



- 徹底的にかかわること
- 学ぶことを諦めさせない
- 勉強を分かるように教えること
- 学ぶことは「生きること」につながる

中学校通級指導教室の課題

※上野一彦先生よりアドバイスをいただきました

- 拠点的ではなくどこの学校にも置くべき。
- 専門の専任教員が担当する。
- 取り出し型だけでなく、通常の学級に入っての指導もする。
- 支援員はそうした先生や、通常の学級の支援をする。
- 指導内容は人間関係などの安定、教科の補充指導、自己理解や自尊感情の促進に焦点を当てる。
- 将来の自立や社会参加を意識した進路相談を重視する。
- 子どもを抱え込むのではなく、いかに卒級させるか。

最後に…

限られた環境で、いかに最大の効果を上げるか
教職員が協力して動けるチームの特色

- ・柔軟性
- ・プロ意識
- ・協働の意欲
- ・お互いへの敬意
- ・ユーモアのセンス

「インクルージョン」
普通学級の特別支援教育マニュアル
ベギー・ハメッケン著
重富真一 他訳 同成社
より抜粋

第5分科会 「特別支援学級・特別支援学校・通級指導教室」 専門性を活かした指導

「特別支援学級・特別支援学校・通級指導教室」 専門性を活かした指導



↓

ひとりひとりの学びに合わせたサポート

現在のA君

- 授業中の様子…教科書・ノートを持って来て聞くようになった
- 板書をするようになった
- 課題に取り組むようになった
- 絵を書く、寝る(授業への不参加)
- 学習の様子…提出物は出来る限り提出している
- 教師に対して…悪態をつくことが大幅に減少

何をしたか？
→一緒に“自主学習／一トで勉強”するようにした

学習を保障することの大切さ

【通級指導教室の指導事例】

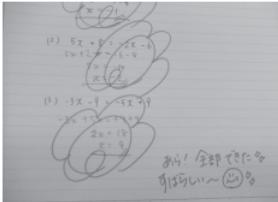
1 家庭学習(自主学習ノート)の支援

- 「自主勉強をしましょう！」「1日自主勉強1ページ！」「家でも勉強して下さいね！」
- このようなこと、言われたことないですか？ 言ったことはないですか？
- 自主学習をしたくても…何をどのように勉強したら良いかが分からないのです。

2 授業での入り込み支援

- 「黒板の文字をノートに写さない子」「嫌でしまう子」「話をしてしまう子」
- 授業の内容が分からなければ、授業に参加できないのです。
- 「黒板の文字をノートに写せない子」
- 写しても…上手に板書ができないのです。

[☆ノートを紹介☆]



[注意していること]

- ①必ず解き方と入れる
- ②日にちを入れる
(子どもの実態に合わせて)
- ③量は少なめにする
- ④大きな丸をつける
- ⑤出来るだけ褒め言葉を入れる

たった一つ、自主学習／一トの支援で子どもが変わる！

勉強の仕方が分からぬから、勉強しないだけ…
子どもは、みんな勉強がしたい！！

1 家庭学習(自主学習／一ト)の支援

勉強したくても、勉強の仕方がわからないんだもん。

計算しておいでって言われても、何の計算をしてくれば良いか分からないよ。



【事例1】勉強をしたくない子はない！
中学生のA君

- 授業中の様子…教科書・ノートを持ってきていない(故に、板書はしない。)
- 席の離れた友達との喧嘩、紙飛行機を飛ばす、教師への暴言(授業妨害)
- 絵を書く、寝る(授業への不参加)
- 学習の様子…定期テスト下位10位以内
自主学習ノート、提出物は未提出

2 授業での入り込み支援

どの問題をやってるか分からない…
何が大切なことなの？

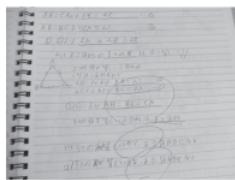
どうせ、やつも分からないし…



【事例2】課題が分かれれば、授業に参加できる！
「一つの分かった」で課題に取り組む

何をしたか？
→大切なところをピックアップしたノートを作った

【☆ノートを紹介☆】



- ・大切な言葉のみを書いておく
- ・色を使って視覚的に分かるように
- ・穴埋めで解けるように
- ・一緒に書きながら、問題を解く

☆自力でノートをとるようになる

授業中のたった一問の「分かった！」が、学習の意欲につながる

何をするか課題が分からなければ、授業に参加しない（できない）だけ…

本当は、問題を解いて丸をもらいたい！！

【ノート紹介】

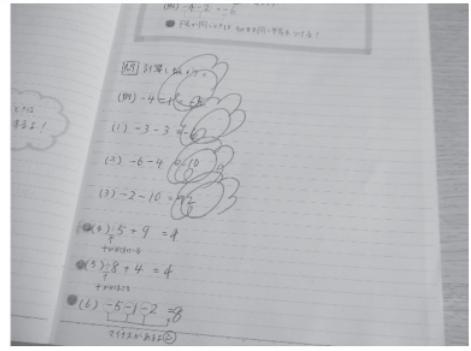


学習を保障することで（私たち教師の支援一つで） 子どもは、変わる

【子どもたちを通して、改めて実感したこと】

- ・勉強をしたくない子はない
- ・教師のたった少しの支援で子どもが変わる
- ・子どもが“できない”ではなく、
- 私たち教師が“できるようにしてない”だけ
- ・学級担任との日々の情報交換
- ・教科担当との授業内容の打ち合わせ

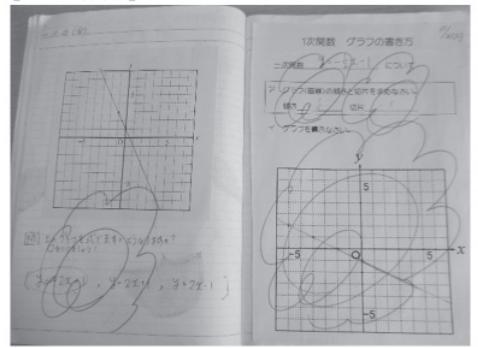
【ノート紹介】



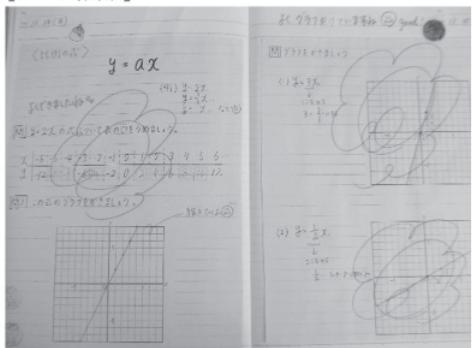
今の教え方で学べない子には、
その子に合った学び方で教えたい。

児童・生徒の実態に合わせた指導を
していきたいと思います。

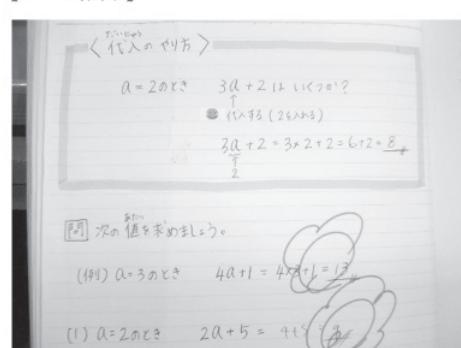
【ノート紹介】



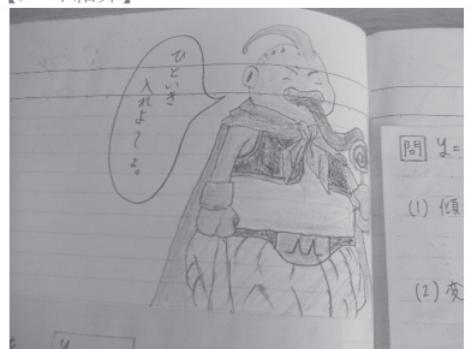
【ノート紹介】



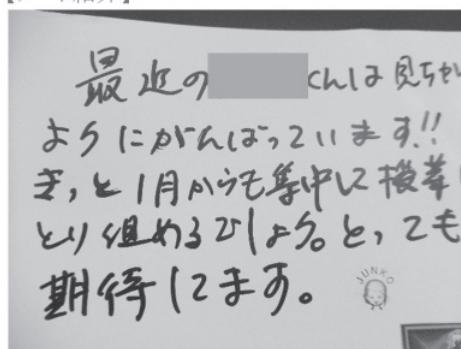
【ノート紹介】



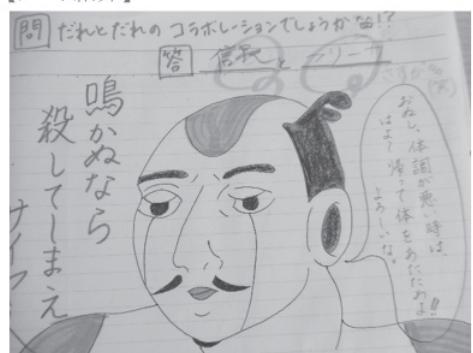
【ノート紹介】



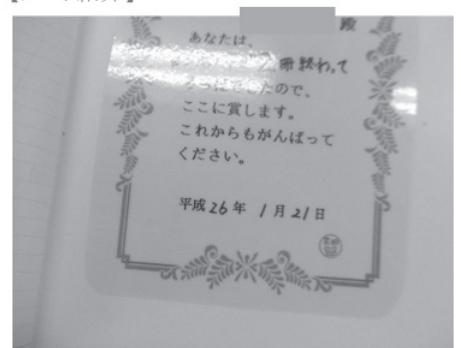
【ノート紹介】



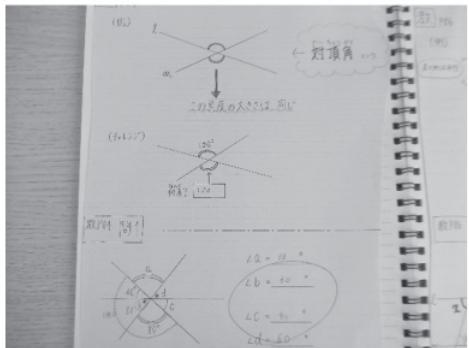
【ノート紹介】



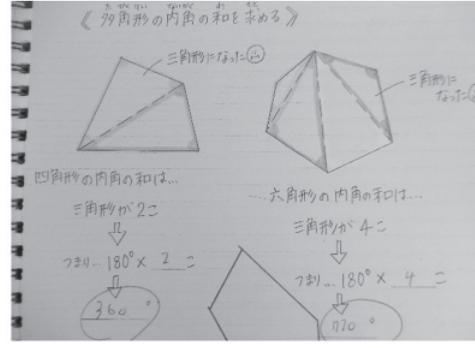
【ノート紹介】



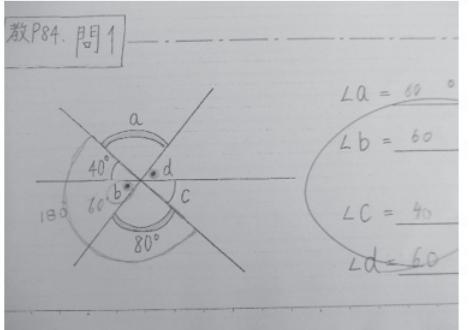
【ノート紹介】



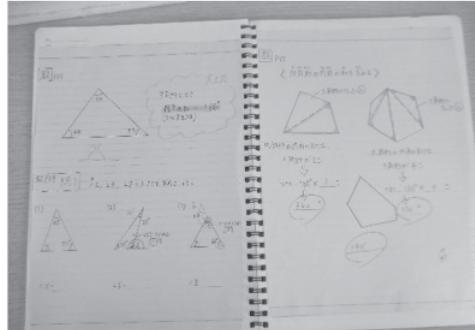
【ノート紹介】



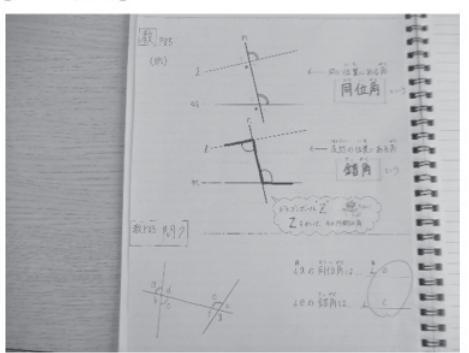
【ノート紹介】



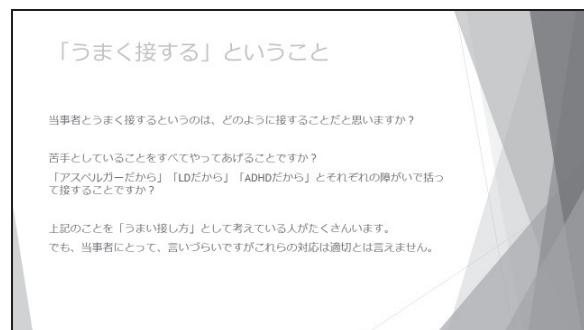
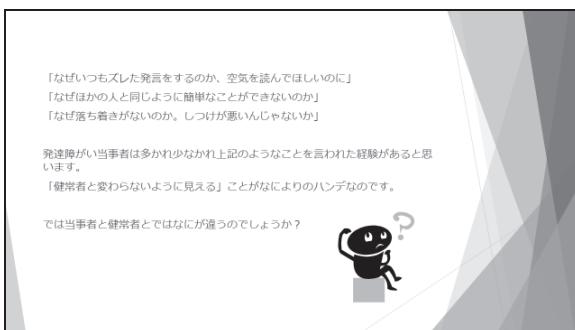
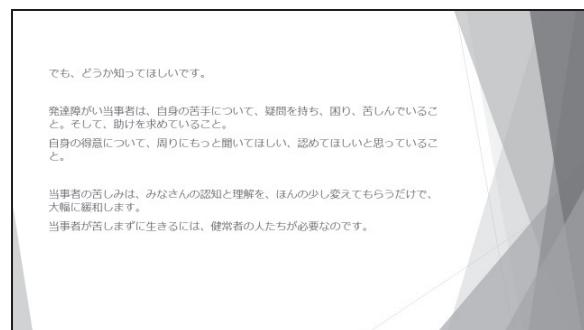
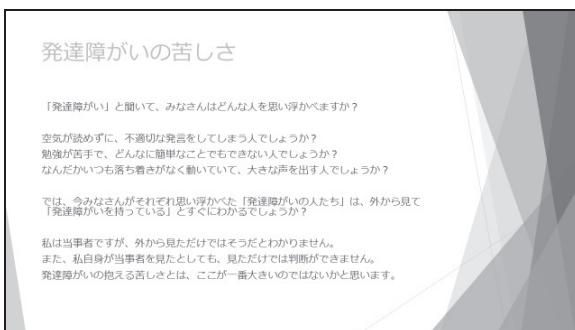
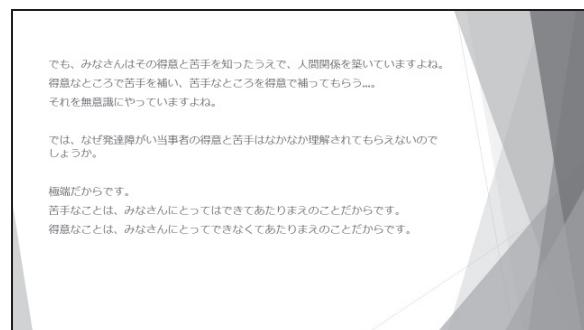
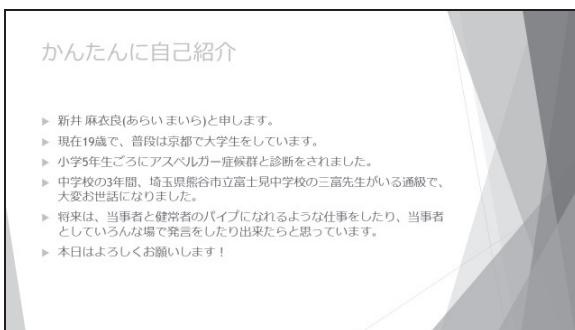
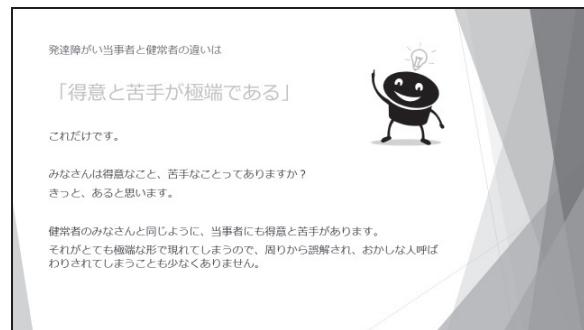
【ノート紹介】



【ノート紹介】



第5分科会 「特別支援学級・特別支援学校・通級指導教室」 専門性を活かした指導



舌手としていることをすべて周りの人にやってもらってしまうと、当事者のやる気や向上心を奪ってしまうことになると私は思います。
当事者は、それぞれの苦手を克服したいと考えている場合が多いです。
その気持ちを汲んで、克服するための助けをするという気持ちを持ってほしいのです。

手とり足とりではなく、手を添えるイメージです。

舌手をすべて「持って去ってしまう」のではなく、苦手を「共有して傍にいて」あげてください。

「取り除いてほしい苦手」と「手伝ってほしい苦手」は違います。
自分でどうにかなることと、どうにかならないことの違いと同じです。
「どうにかならないと思いつかうこと」と「どうにかなること」の区別をつける手伝いをしてあげてください。

ご清聴ありがとうございました！



「アスペルガーだから」
「LDだから」
「ADHDだから」
障がいで接し方を変えることは大切な配慮といえます。

ですが、同じ障がいだからと言って、全員が全員まったく同じでしょうか。
人は10人いれば10通りの個性があるように、同じ障がいを持った当事者が10人集まれば、10通りの個性や特性があります。
「この障がいにはこういうことをしたほうがいい、してはいけない」という、障がいだけを見た接し方はやめてほしいです。
当事者に対する接し方をマニュアル化しないでください。
「障がい」の前に「その人自身」を見てください。

障がいは、その人自身を形成する一要素でしかないのです。

第5分科会 「特別支援学級・特別支援学校・通級指導教室」 専門性を生かした指導
「協議の内容」

提案者からの実践報告

生徒主体の支援を！～卒業生とともに3年間の学びを振り返る～

埼玉県熊谷市立富士見中学校 発達障害・情緒障害通級指導教室

三富 貴子、橋爪恵里子

森 香明、新井 麻衣良

新井 俊江（保護者）

平成19年度から「文部科学省指定研究開発学校」の指定をうけ、指導要領によらない教育課程の中で行われた3年間の取り組みについて紹介。研究課題は、「発達障害を含む障害のある生徒や学校生活に不適応を示す生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程の編成及び指導の在り方に関する実践的な研究」であり、「それぞれの学校でできることとできないことがあることを理解したうえで、それぞれの学校でもできることを見つけて行うことができる」を念頭に話題提供する。

富士見中学校では、障害のある・なしではなく、困っている子は全員を助ける、助ける手立てを講じる、「みんなが資源みんなで支援」を掲げ、「困っている 全ての生徒へ 分かる支援を！」行うために「目で見てわかる授業」を実践してきた。

特に、制度の狭間に埋没してしまう子どもたち（グレーゾーン）に対して、通級の弾力的な運用でこの子どもたちに対する指導が可能になったことや、無理のない個別指導計画を作成するために、シンプルな書式、パソコンで管理、在籍学級の担任と通級担当が一緒に書くことで負担を軽減するなどの工夫について紹介。

その中で、通級指導教室での指導事例として、1、家庭学習（自主学習ノート）の支援、2、授業での入り込み支援について、中学1年生A君のノートの内容などを写真で紹介しながら変化の様子について報告をいただいた。

また、通級を卒業した新井さんとの3年間の様子について、「学ぶ場所づくり」から卒業までの様子の紹介を取り混ぜながら、本人と保護者、発表者との問答形式での発表が行われた。内容として、本人及び保護者の入学前の不安（担任とのマッチングや学校内の移動、授業の理解、友人関係など）な状況や、入学式のリハーサルを行ったこと、担任とのマッチングがよかつたこと、通級クラスと通常クラスのクラスメイトの状況など本人の気づきからの成長がとてもよく理解できる内容であった。

その後、当事者からの話題提供として、本人が作成したパワーポイント、「当事者の目線から伝えたいこと～内と外の違いから発達障がいを考える～」を本人が発表した。

内容として、発達障害（アスペルガー症候群）と診断されてからの本人の心情の変化や障害を理解する難しさなどが、とてもよくまとめられた発表であった。

特に、本人の「発達障害は見た目では分かりづらい障害であり、それが当事者にとっての悩みでもある」との言葉には、意味深いものを感じた。そして、昼休み中に前半部のアンケートを本人がまとめ、いくつかの回答をしっかりと行っていた。

この発表で、中学校通級指導室の課題について、専門の専任教員の配置や支援員の育成、

指導内容(人間関係の安定、教科の補充指導、自己理解や自尊感情の促進)など多くの課題が残されている現状が浮き彫りになったといえる。

指導助言

「特別支援学級・特別支援学校・通級指導教室」専門性を生かした指導

指導助言者 越谷市教育センター教育相談担当 田嶋 栄藏

現在の職場で教育相談担当として、就学相談を行っている。保護者と相談を行っている中でのエピソードを交え、教科書に沿った授業ではなく、「できた、わかった」が体験・経験できる授業の大切さなどを伝えている。新井さんの「将来は、生徒たちと先生をつなぐ仕事がしたい」という言葉に感動。発表者の中学校で行われている「個に応じた指導の具現化」が当事者である新井さんに「自己決定・自己選択」を促し、自己実現につながっていったのだと考える。

分科会でのキーワードとして、人と人を「つなぐ」、人と学びを「つなぐ」、「出会い」というつながりも「つなぐ」になっている。それがとても伝わる事例であった。

特別支援教育のポイントとして、子どもたちの居場所を作ることが大切である。また、教師や保護者が子どもたちにどう寄り添っていくのかが、子どもたちの成長に大きく影響することを理解したうえでかかわっていく必要がある。

また、埼玉県で行われている特別支援教育について、1. インクルーシブ教育システムの構築、2. 多様な学びの場の整理、3. スクールクラスターなどを紹介いただいた。

指導助言

子どもの思いに寄り添う～インクルーシブ教育システムの構築～

指導助言者 埼玉純真短期大学教授 伊藤道雄

冒頭、特別支援教育が変化の時代を迎えていることを紹介。従前の「医学モデル」中心から、「社会モデル」へと変化してきた経緯を説明。その後、2012年7月にまとめられた「中央教育審議会初等中等教育分科会まとめ」を参考に「共生社会形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進」について説明、「共に学ぶこと」の必要性と大切さ、それには多様性と柔軟性が必要であることなどを報告。

子どもの強みを伸ばし、弱い部分の援助を行う「子どもの援助ニーズに応じた援助」を行うことによって、自己決定力を育成することが重要である。そのために、「行事」では、テーマに即し熱中でき、充実観のある内容を行い、「授業」では、援助の必要な子どもでも参加できる、分かる授業工夫を行い、「学級経営」では、まちがってもいいという、一人一人が大切である、という環境づくりを行うことなどを丁寧に報告いただいた。

(文責 埼玉純真短期大学 高橋努)

第4回研究セミナー参加者

1. 参加者 計	312名
来賓・指導助言者・提案者	19名
一般参加者	64名
・午前のみ	6名
・第1分科会	14名
・第3分科会	5名
・第4分科会	4名
・第5分科会	18名
大学関係者	26名
1年学生・2年学生	203名（2年ボランティア30名を含む）

平成26年度第4回埼玉純真短期大学研究セミナーアンケートの結果

1. アンケート回収率 75% (48名 / 64名)

2. 男女別アンケート回答者 (一般) 男 10名 女 38名

3. 年齢別参加者

① 10歳代～20歳代	10名	② 30歳代～40歳代	20名
③ 50歳代	15名	④ 60歳以上	2名
⑤ 無記名	1名		

4. 所属・役職等

① 一般	6名	② 保育園	8名
③ 幼稚園	1名	④ 小学校	17名
⑤ 中学校	3名	⑥ 高等学校	2名
⑦ 特別支援学校	0名	⑧ 関係機関	2名
⑨ その他	8名	⑩ 無回答	1名

(その他 : 療育施設、介護施設、障害者福祉施設、障害児童施設、放課後デイサービス、サービス提供者)

(役職 : 教頭、教諭、主任保育士、保育士、指導主事、特別支援コーディネーター、NPO代表、児童発達支援管理責任者、生徒介助員、生活支援員など)

5. セミナーの情報入手

① 学校(園、教委)	32名	② 地域の会館等のチラシ	1名
③ 地域の研究会	1名	④ 友人や友達から	5名
⑤ その他	9名		

(その他：市民公開講座で聞いて、市の研修で聞いて、埼玉純真短期大学からのお知らせ、埼玉純真短期大学の教員から聞いて、埼玉県教育センターの研修会で聞いて、毎年参加しているなど)

6. 参加しての感想をおきかせください

(1) 基調講演について

① とても良かった	37名	② 良かった	8名
③ まあまあだった	0名	④ 少し物足りなかった	0名
⑤ 期待したものになつていなかつた	0名	⑥ 無回答	3名

(2) 分科会提案について

① とても良かった	34名	② 良かった	8名
③ まあまあだった	2名	④ 少し物足りなかった	0名
⑤ 期待したものになつていなかつた	0名	⑥ 無回答	4名

(3) 分科会の基礎講座について

① とても良かった	24名	② 良かった	16名
③ まあまあだった	2名	④ 少し物足りなかった	0名
⑤ 期待したものになつていなかつた	1名	⑥ 無回答	5名

(4) 分科会の指導助言について

① とても良かった	25名	② 良かった	13名
③ まあまあだった	2名	④ 少し物足りなかった	0名
⑤ 期待したものになつていなかつた	0名	⑥ 無回答	8名

(5) セミナーの運営について

① とても良かった	32名	② 良かった	13名
③ まあまあだった	1名	④ 少し改善したほうがよい	1名
⑤ 改善を希望する	1名	⑥ 無回答	0名

(6) 全体の感想、次回の企画、要望、気づいたこと等について

○ 基調講演について

- ・ とても分かりやすい内容でした。
- ・ 気になる子への対応を学ぶことが出来、良かったです。
- ・ ペアを作つて様々な実践ができて楽しかった。
- ・ 支援を必要とする子供たちの気持ちや状態を、具体的に理解できました。

- ・体験が理解に役立ちました。コミュニケーションの仕方を工夫したいと思います。
- ・最後の神様の話がよかったです。また聴講したい。
- ・視覚からも訴えるとても参考になる講演でした。
- ・実演をまじえて、なるほどと理解できました。
- ・実践をふまえながら分かりやすく、知的障害、発達障害を持つ児童の心理を解説してください大変良かった。児童に接するとき、大変役に立つ内容だった。
- ・講義だけでなく、活動もあつたりし、より理解できました。
- ・勉強不足だったことが良くわかった。
- ・多くのヒントをいただきました。
- ・アクションタイムを通しての講演で、とても分かりやすかったです。
- ・わかりやすかったです。
- ・体をつかった時間もあり、興味を持ってあきずに最後まで聞きました。
- ・楽しい内容でした。
- ・ワークショップで体験できることで、実感できました。
- ・エピソードや体験型の演習もたくさんあり、勉強になりました。
- ・子どもにとっての不安、日々感じていることなど改めて考えさせられました。今後の指導に注意していきたいです。ありがとうございました。
- ・今後に役立つ内容でした。ありがとうございました。

○ 分科会について

※ 提案について

- ・事例があり分かりやすく聞くことが出来ました。
- ・具体的で分かりやすかったです。
- ・保育所の指導にも参考になることたくさんで良かったです。
- ・小学校教員として、高等学校の話が聞けてよかったです。
- ・少人数で色々話せた。
- ・ノート作りの支援はすばらしいと思います。本人、保護者の提案は親近感があり、痛みがよくわかりました。
- ・具体的なわかりやすい実践がよかったです。
- ・本人の力強い話に感動しました。
- ・チーム富士見すばらしいです。私自身も改めて目の前の子どもたちに誠実に向き合っていきたいと思いました。
- ・時間に限りがあり仕方ないですが、もっと聞きたかったです。
- ・ご本人の考え方や感じ方を聞けたことは、とても貴重でした。
- ・通級の実践がよくわかりました。

※ 基礎講座について

- ・ 自閉症での薬について理解できました。
- ・ 井上先生のお話、とても好感しました。
- ・ 薬について知ることが出来てよかったです。
- ・ 自分の抱えている課題と照らし合わせて聞き参考になった。
- ・ 臨床心理士の視点からお話が聞けてよかったです。
- ・ 新しい情報を教えていただきよかったです。
- ・ 障害だけでなく”その子”自身を今まで以上にみていきたいです。

※ 指導助言について

- ・ 現場（小学校）での生の声・状態が聞けて良かったです。
- ・ 参加型でとても楽しく学ぶことができました。
- ・ 少人数だったので、充実した話し合いが持ててよかったです。
- ・ 時間が少なく、もう少しじっくり聞きたかった。
- ・

※ 全体を通して

- ・ 基調講演のとき、学生の私語がうるさかったです。
- ・ 分科会（第1分科会）の流れがよくわからなかった。実りのある話し合いができなかった。
- ・ 基調講演のお話は、実践もあり、とても勉強になりました。

素晴らしい話を聞いている中の、学生さんの私語がとても気になりました。「静かに聞く」ということを、しっかり指導していただきたいと思いました。

分科会の中での「グループの話し合い」は、全く意味が分かりませんでした。1年生ということで難しい部分もあるのだと思いますが、司会の方の「記録と司会と発表者を決めて話し合ってください」という言葉には、まさに「不安」の一言です。具体的にどんなことを話し合うのか、きちんと決めてほしかったです。何を求めているのだろう?と感じながら参加していましたが、学生さんも何をしていいのか、笑っているだけだし、こちらが進めてしまつていいものなのか疑問でした。学生さんにとって、職場、電場の先生方と関わることは、とても貴重なのではないかと思います。それを生かしたグループ討議にするべきではないでしょうか?発表している方がいるのに、まとめが終わらずに話している……そのようなことは意味がありません。正直?という思いが残りました。乱文にて大変失礼しました。

平田先生の講演だけの一日が良かったです。心に残るお話、ありがとうございました。

- ・ 色々な方の意見が聞けてとてもよかったです。
- ・ 参加させていただき、ありがとうございました。
- ・ 今回は、参加させていただき、ありがとうございました。
- ・ 現場の先生方のお話が聞けて、とても勉強になりました。ありがとうございました。

- ・初めての参加でしたが、本当に良かったです。また参加したいです。
- ・今日は来てお話を聞けて、今後明るい見通しが出てきました。ありがとうございました。
- ・様々な立場の方のお話を聞けてよかったです。改めて反省点も見つかったので、次へ生かしていきたいと思います。
- ・学生ボランティアさんの案内は、はきはきと学生らしいさわやかさを感じました。全体会場内の私語（後方席から聞こえました）は、会を進める教授方にも失礼かと思いました。途中「静かにしてください」の声もありましたが、学びの気持ちを失います。講師の平田先生のジェスチャーは、全体を引きつける魅力あるスタートになりました。

参加者の幅が広く、セミナーの開催の仕方もよかったです。交流の場が持てたことが、ありがとうございました。ぜひ、来年も参加したいと思います。ありがとうございました。

- ・分科会でいろいろな立場の方の意見を聞かせていただき、刺激になりました。
 - ・参加者が増えていることがわかる。今後も継続していただき、地域の中核になってほしい。
 - ・また次回も参加したい。
 - ・係を持った学生さんが、大きな声でいいさつ、とても気持ちよかったです。全体会に参加した学生の私語が多く残念でした。
- 全体会、分科会ともに大満足です。
- ・県北でこのようなセミナーが開催されることが、とてもありがたいです。素晴らしい先生方、ありがとうございました。
 - ・セミナーを受けさせていただき、とても勉強になったので、次回もぜひ参加させていただきたいと思います。
 - ・毎日資料の説明が忙しく、理解が追いついていかないので、全体会、分科会の日にちを分けて、ゆっくりと聞き理解していきたい。または、時間をもう少し長く設定する。
 - ・案内の学生さんたちが笑顔で対応してくださいり、温かい雰囲気がよかったです。おととしと比べ、学生さんたちの私語がやや気になりました。
 - ・学生の私語がやや気になりました。
 - ・女子大生ははつらつと元氣でよいのですが、全体会会場でのマナーなど、とてもうるさくてこまります。一般参加していますし、社内でのマナー等指導すべきことだと思います。人が話をしていても、全く静かにしない姿勢はいかがなものか？
 - ・チームふじみ、よかったです。また、まいらさん、お母様の直接の話を聞けて良かったです。
 - ・平田先生のお話、富士見中学校の取り組み、新井さん親子の方々のお話を、これから指導に生かせたらと思います。
 - ・当事者の話に感動しました。

- ・ 感動、感激の一日。大変充実した研修になりました。今後とも羽生市をよろしくお願ひいたします。
- ・ 又、来年も参加したいです。
- ・ 初めて参加させていただきましたが、チーム富士見の発表を聞いて、また明日から頑張ろうと思いました。ありがとうございました。
- ・ 分科会の教室案内（地図）が、レジメの中にあるとわかりやすいと思いました。
ご本人へのアンケートは、お話を伺ってからのほうが良かったです。（ブレイク中に内容を精選する時間は必要と思いますが...）
- ・ 今までの研修と比べて、大変勉強なることが多かったです。ありがとうございました。
- ・ これから学校生活で生かしていきたいと思います。ありがとうございました。
- ・ 今回は午前中のみの参加でしたが、平田先生の基調講演は時間の経過を忘れるほど、熱中させていただきました。ユーモアあふれる分かりやすい講演だったので、専門知識がない私でも理解することが出来ました。このような機会に参加させていただき有難うございました。
- ・ 素晴らしい講座でした。わかりやすく、楽しい講演でした。ありがとうございました。
- ・ 次回も期待しています。

あとがき

第4回埼玉純真短期大学研究セミナーが皆様のご協力を得まして無事成功裡に終わることができました。誠にありがとうございました。

今回のセミナー開催に当たりましては、埼玉県教育委員会、羽生市教育委員会、加須市教育委員会、行田市教育委員会、熊谷市教育委員会、埼玉県特別支援教育研究会の皆様にご後援を賜り、貴重な実践のご提案やご指導をいただき、またチラシのご案内等にまでご協力賜り心から感謝申しあげます。特に、各分科会でご提案されました 鈴木美芳 様、齋藤秀吉 様、松澤ゆかり 様、雨宮史子 様、三富貴子 様、森香明 様、橋爪恵里子 様、新井麻衣良 様、新井俊江 様にはご多用の中、何度も打ち合わせを行いご提案いただきましたことに心から感謝申し上げます。

また、近隣市町村から大勢の方の参加を得、盛大に行われましたことに喜びと本学の地域への役割の重要性を改めて感じています。

さらに、基調講演をいただきました 東洋英和女学院大学准教授 平田幸宏 様、さらに分科会でご指導いただきました 熊谷市教育委員会指導主事 板倉伸夫 様、東部教育事務所指導主事 井上弘江 様、発達支援教室ビリーブ代表・文教大学講師 加藤博之 様、埼玉県教育局特別支援教育課指導主事 山下理恵子 様、越谷市教育委員会指導主事 田嶋栄蔵 様より貴重なご指導を賜りましたことに重ねて御礼申し上げます。

本学の研究につきましては、日々研鑽を重ねているところですが、このセミナーを機会にさらに努力していきたいと考えています。

今後とも特別支援教育の要となって地域に引き続き貢献していきたいと考えているところです。

これからもご支援ご協力の程、よろしくお願ひいたします。

第4回研究セミナー実行委員長 伊藤道雄

埼玉純真短期大学教職員

学長	藤田 利久	持田 京子	大澤 尚子
	伊藤 道雄	安村由希子	片山 美冴
牛込	彰彦	金子恵美子	相馬 萌
小澤	和恵	浅井 広	田口 宏美
入江	良英	大山 富一	寺田 明美
稻垣	馨	佐藤 猛	西山 理恵
安倍	大輔	奥貫慶一郎	林 真麻
加藤	房江	田中 淳一	松原みゆき
高橋	努	中村 周	
細田	香織	大木 美晴	

第4回（平成26年度）埼玉純真短期大学研究セミナー報告書

発行日 平成27年 3月31日

編 集 埼玉純真短期大学研究セミナー実行委員会

印 刷 福田印刷所

発 行 埼玉純真短期大学

〒348-0045 埼玉県羽生市下岩瀬430番地

TEL 048-562-0711

FAX 048-562-0715



埼玉純真短期大学